# 傅 多 11

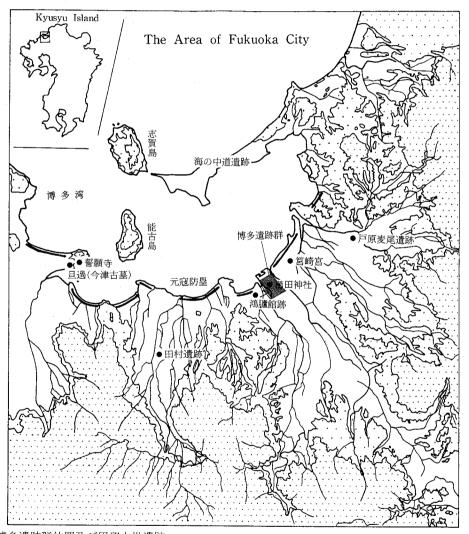
一博多遺跡群第33次調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集

> 1988 福岡市教育委員会

# 傅 多 11

## 一博多遺跡群第33次調査報告-

## 福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集



博多遺跡群位置及び周辺中世遺跡

遺跡調査番号 8618 遺 跡 略 号 HKT33

1988

福岡市教育委員会





SD-004 全 景



SD-004 内日本刀出土状況



日本刀鞘

現在、福岡都市圏の窓口として市街地の再開発が著しい 旧博多部は、古代から中世にかけて対外貿易の一大拠点と して歴史の表舞台を飾った地域でもありました。

今回の調査でもそれを裏付けるように、古墳時代から中 ・近世にわたるおびただしい遺構・遺物が検出されており、 とりわけ、調査区を横切る大溝の発見は、中世貿易都市「博 多」の富をめぐる争乱の歴史を物語るものでした。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究の場で活用されることを切に願っております。

調査に際し、御協力・御指導を賜わりました方々に心より感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 佐藤 善郎

## 例 言

- 1. 本書は、福岡市教育委員会が1987年度に実施した博多遺跡群第33次調査の遺構編である。
- 2. 本書で用いる方位は真北とした。
- 4. 本書で用いる貿易陶磁分類は「博多出土貿易陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 W 博多(1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊 1984年)に拠った。
- 5. 本書に掲載した遺構実測図は、下村・加藤の他、中橋孝博・田中良之(九州 大学医学部)、汐崎美紀・陳雅文・宮崎由美子(西南学院大学々生)、小川泰樹 ・荻村昇二・本橋照代(明治大学々生)、黒田和夫による。
- 6. 本書に掲載した写真は、下村・加藤による。
- 7. 付編(1)の出土人骨については九州大学医学部解剖第2講座・中橋孝博講師に、付編(2)の出土馬骨については鹿児島大学農学部家畜解剖学教室 西中川駿助教授にお願いした。
- 8. 本書の執筆・編集は下村の協力を得て加藤が行なった。
- 9. 本書に関する遺物・記録類(写真・スライド・図面等)は、整理終了後福岡市 埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

# 本文目次

I.調查	査に到る経緯····································
1. 氰	調査に致る経過·······1
2 . 1	調査の組織
	調査経過
II. 博	多遺跡群第33次調査の概要
1. ì	貴跡の位置と環境3
2. 1	調査の概要
	1)古墳~古代の遺構13
	2)古代末~中世の遺構
()	3)近世・近代の遺構27
III ± ž	とめ·······30
	- ^ 1)博多遺跡群第33次調査出土の中世人骨······32
()	2)博多遺跡群第33次調査出土の馬骨について・・・・・・35
	接 园 口 火
	挿 図 目 次
⊠ 1	調査前風景
図 2	調査的風景 2 筑前国福岡城石垣普請伺下絵図 3
図 3	博多遺跡群調査区位置図(1 / 10000)
⊠ 4	福博古図 (三奈木黒田家蔵)
⊠ 5	33次調査区の位置(1/1000)
図 6	調査区第1面全体図 (1/200) 9
図 7	調査区第 2 面全体図(1/200)
⊠ 8	調査区第3面全体図(1/200)
⊠ 9	調査区第1面全景
図10	調査区第 2 面全景
図11	調査区第 3 面全景
図12	S C -153実測図(1 /60)····································
⊠13	S C - 153
⊠14	S C - 154 S C - 154実測図(1 / 60)····································
図15	
図16	$S_{i}C = 154$
図17	S C - 154
図18	S C - 161実測図 (1/60)
	S C -161実測図(1 / 60) 15 S C -161 15
	S C - 161実測図 (1/60)       15         S C - 161       15         S E - 142実測図 (1/60)       16
図19	S C - 161実測図 (1 / 60)       15         S C - 161       15         S E - 142実測図 (1 / 60)       16         S E - 142       16
. 図19 図20	SC-161実測図( $1/60$ )
図19	S C - 161実測図 (1 / 60)       15         S C - 161       15         S E - 142実測図 (1 / 60)       16         S E - 142       16

図23	S K -148 ····	…16
図24	S K - 140実測図(1 / 40)	…17
図25	S K -140	17
図26	S D - 004地形図(1 / 180) ····································	17
図27	S D - 004土層図(1 / 100)	17
図28	S D - 004土層断面	19
図29	S R - 103実測図(1 / 30)······	20
⊠30	S R - 103	20
図31	S R - 120実測図(1 / 30)······	20
図32	S R - 120 ······	
⊠33	S R - 107実測図(1 / 30)······	20
図34	S R - 107	20
⊠35	S R - 121実測図(1 / 30)······	
	S R - 121 天侧区 (1 / 30) S R - 121 ·································	
図36 図37	S R - 121 S R - 141実測図(1 / 30)······	
	S R - 141 天 例 S C 1 / 50) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
⊠38	S R - 119	
⊠39		
⊠40	S R -119実測図 (1/30)	21
図41	SD-004・3層內馬骨出土状況 (1/20)	22
図42	3層內馬骨出土状況	22
図43	S D-004内日本刀出土状況 (1/40)	
図44	日本刀出土状況	23
図45	日本刀一大刀・腰刀	
図46	日本刀一小刀·····	23
図47	S E-115実測図(1/40)	
図48	S E -115 ·····	····24
図49	S E - 166実測図(1 / 40) ······	
図50	S E -166 ·····	
図51	S E - 166井筒内 ······	25
図 $52$	S K - 089実測図 (1 / 40) ······	26
図53	S K - 089 ····	26
図54	S K-009実測図(1/30)·····	26
図55	S K -009 ····	26
図56	SK-005実測図 (1/30)	27
図57	S K - 005 ····	
図58	イギリス白磁出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	27
図59	イギリス白磁窯印・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	27
図60	SK-015実測図(1/40)	28
⊠61	S K - 015内部	
図62	埋甕実測図(1 / 40)	
⊠63	埋甕	29
	SE-034実測図 (1/40)····································	20
⊠65 ⊠cc	博多 3 次・33次大溝位置(1 / 4000)	
図66	博多 3 次・33次大海位直(1 / 4000)   福岡市全図(1 / 1000)	
図67		31
	表目次	
生 1 上		0
	専多遺跡群調査地点一覧	
表 2 道	B.(用)	38

## I. 調査に到る経緯

## 1. 調査に到る経過

明治22(1889)年、旧国鉄博多駅開設以後九州の玄関口として発展してきた駅周辺地域は、昭和50(1975)年の新幹線乗り入れ、昭和58(1983)年福岡市高速鉄道(地下鉄)開通以後さらに重要度を増し、現在高層建築・道路整備による再開発のラッシュである。

当該地は古来より大陸文化の受入口として栄えてきた地域であり、多くの文化遺産が埋蔵され研究者からも常に注目されてきた地域である。したがってこれを受けての民間開発に伴う緊急発掘調査も昭和62(1987)年度現在で37次にわたって行われている。

今回の調査は昭和60(1985)年6月17日、株式会社三井不動産より、博多区祇園町8番地他内におけるビル建設申請が教育委員会埋蔵文化財課になされたことに始まる。埋蔵文化財課では当該地が博多遺跡群内であること、隣接の地下鉄祇園出入口工区・博多25次調査区で遺構が確認されていることなどから埋蔵文化財の包蔵を予想、同年6月24日試掘調査を行ない、遺構・遺物の包蔵を確認した。埋蔵文化財課ではこの成果をもとに株式会社三井不動産との協議にはいり、61年7月25日より本調査を行う事となった。

対象面積:898㎡ 調査面積:776㎡

調査期間:昭和61(1986)年7月25日~11月15日

#### 2. 調査の組織

調查委託:株式会社三井不動産 調查主体:福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

埋蔵文化財課長 柳田純孝

庶務担当:飛高憲雄(第2係長)・松延好文

調査担当:下村 智・加藤良彦

調査・整理作業:高田マサエ・松尾君子・舎川春江・柴田常人・山本キクノ・坂田セイ子村田敬子・門司弘子・大瀬良清子・近藤澄江・百武義隆・津川真千代・栗木和子・渋谷友代・古賀美恵子・衛藤富子・高木正代・窪田慧・黒田和生・谷吉美・吉住シヅエ・浦貴文・奥園佳代子・青柳美紀・町居則子・小宮歩美・池田初美・村嶋里子・前田直子・国武真理子・宮崎由美子・嶌田貴代・陳雅文・汐崎美紀・小川泰樹・荻村昇二・本橋照代・小城信子・能美須賀子・楢崎多佳子・木村厚子

なお、今回の調査にあたって、施主株式会社三井不動産、施工業者株式会社三井建設には多くの御理解と御協力を賜った。記して深く感謝申し上げる次第である。

## 3. 調査経過

1986年7月21日 業者による1次掘削及び矢板入開始

7月25日 2次掘削開始

7月28日 第1面遺構検出・掘削開始

8月9日 SD004確認トレンチ設定

9月5日 第1面全景写真撮影

9月11日 第2面遺構検出・掘削開始

9月26日 SD004内で土壙墓検出(人骨残存)

10月6日 SD004内で日本刀検出

10月9日 SD004内で馬脚骨検出

10月16日 土壙墓内人骨取上げ (九大医学部田中良之・中橋孝博)

10月18日 第2面全景写真撮影

10月22日 第3面遺構検出・掘削開始

10月23日 古墳・奈良時代竪穴住居検出

11月7日 第3面全景写真撮影

11月14日 遺構実測終了

11月15日 地形測量終了·現場撤収



図1 調査前風景

## II. 博多遺跡群第33次調査の概要

## 1. 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は、北を陸繋島である志賀島と海の笹道、西を茶島半島・安界島・能舌島とによって囲まれた天然の良港である博多湾岸の南東部に位置する。

湾岸には、湾内を巡る左転廻流と、瑞梅寺川・室見川・那菊川・多寿良川などの諸河川の搬出する砂とによって著しい古砂丘の発達が見られ、当遺跡群は那珂川の右岸に形成された「博多浜(櫛田浜・袖の浜)」・「萍(息)の浜」と称される二つの砂丘上に立地している。「博多浜」は弥生時代中期前葉の甕棺墓が営なまれており、それ以前の形成である事が知られる。「沖の浜」は第5次調査地点で地表下 4.5mの位置から碇石が出土しており、古代段階までは形成途上にあった比較的新しい砂丘であり、永仁元(1293)年成立の『蒙古襲来絵詞』下巻の詞書に「息の浜」の字句が伺がえ、弘安の役一1281年頃には陸化していた様である。遺跡群は西を那珂川とその支流の博多川、東を中世末に開削されたと伝えられる岩堂川、南を同じく石堂川開削以前に砂丘南辺を西流し那珂川に合流していた旧比恵川を改修したと伝えられる「房州堀」にと、中世末には四方を水によって囲まれた地域である(図2・3)。

大陸と指呼の間にあるこの地は、江戸幕府の鎖国に至るまで常に対外交渉の表玄関としての役割を果たしてきた。弥生時代中期には甕棺墓群を成立させる集団となり、4世紀から5世紀初頭にかけては方形周溝墓群と70m級の前方後円墳(博多1号墳)を出現させるまでになっている。筑紫国造磐井の反乱後の536年那の津の管家の設置以降、奈良・平安時代には大宰府の要津・唯一の外港として軍事・外交の基幹をなし、平安後期から鎌倉前期にかけ居留唐人の「博多大唐街」の形

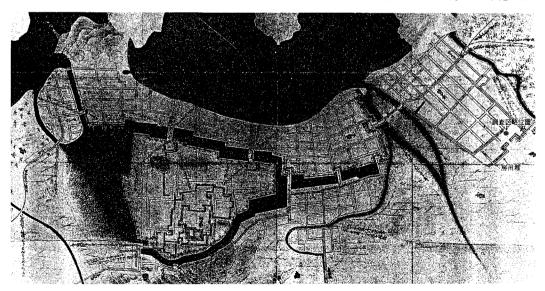
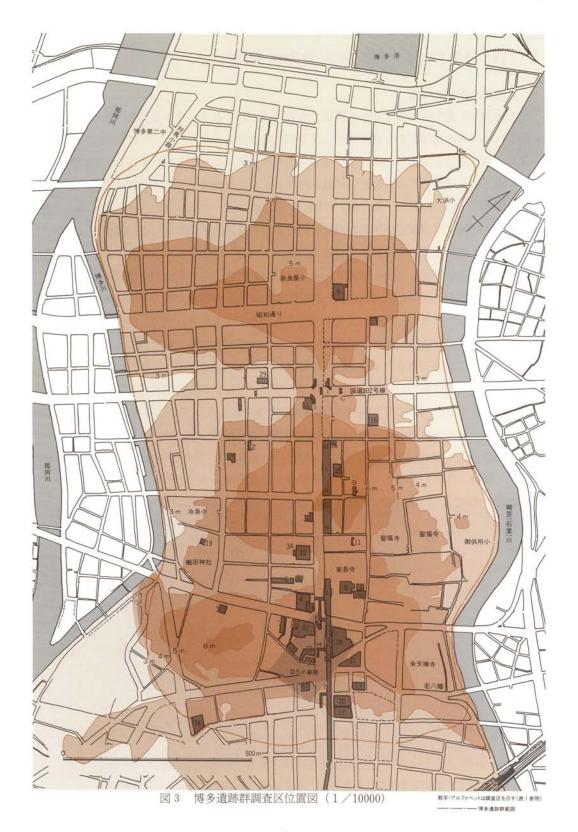


図2 筑前国福岡城石垣普請伺下絵図 明和2(1765)年(福岡市美術館蔵)



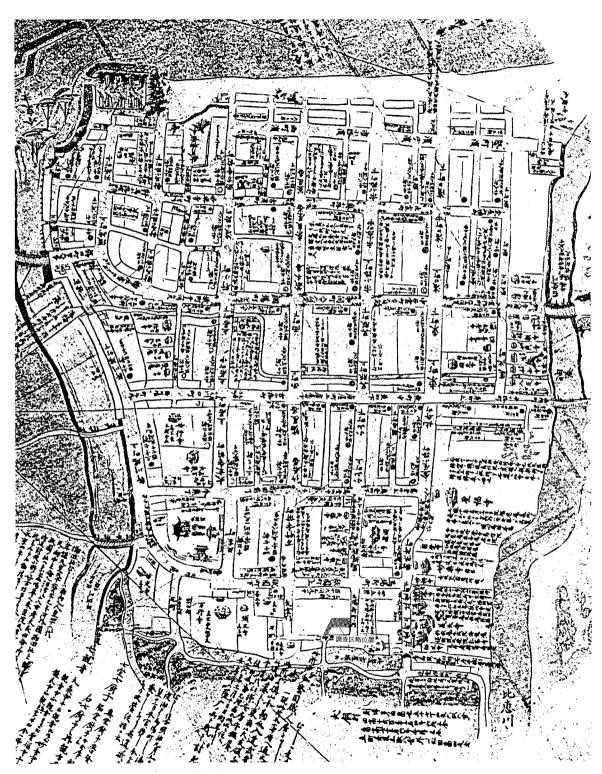


図 4 福博古図 文化 9 (1812)年 (三奈木黒田家蔵)

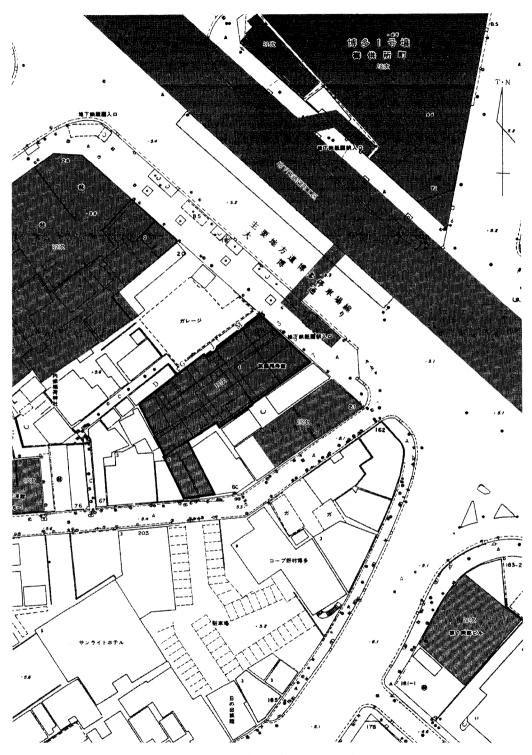


図5 33次調査区の位置(1/1000)

成、平清盛による「補の湊」の開削、聖福寺・承天寺・妙楽寺の禅寺の建立、13世紀末の鎮西探題の設置、室町幕府の九州探題の設置・勘合貿易の開始と名実ともに九州の中心となる。しかし、平和裡の発展のみではなく、対外的には貞観11(869)年新羅海賊侵寇・寛文 2 (1019)年 刀伊の入寇・文永11(1274)年弘安 4 (1281)年の元寇、対内的には天慶 3 (940)年藤原純友の乱、元弘 3 (1333)年鎮西探題の滅亡、永録 2 (1559)年大友・筑紫惟門の戦い、永禄12(1569)年・元亀 2 (1571)年大友・毛利の戦い、天正 8 (1574)年大友・龍造寺の戦い、天正(1583)年大友・島津の戦いと、この地の支配権をめぐって繁栄と戦乱を繰り返し、天正14(1586)年島津の焼き打ちによりことごとく焼き尽くされた。天正15(1587)年島津征伐に向かう太閣秀吉によって現町割に復興され、秀吉の思惑とも相俟って朝鮮出兵の兵站基地として往時の賑わいをとりもどすが、徳川幕府の鎖国により、国際貿易都市としての役割を長崎に譲り、「黄金の日々」に遥かに及ばぬ一城下町・商業都市として明治を迎える。

#### 2. 調査の概要

調査地点は「博多浜」砂丘の南部、東西方向に走る稜線中央部から南に若干下がった、現地 表高5.21mを測る地点である(図3・5)

調査は近現代の攪乱と近世包含層を除去した地表下0.7~1.0m-標高4.0~4.3mの第1面、 古墳~奈良時代の包含層である暗褐色砂質土上面-標高3.8m前後の第2面、基盤層である黄白 色砂上面-標高3.3~3.5mの第3面の計3面にわたって行なった。

検出した遺構は第3面での古墳時代布留式併行期の住居・井戸・土壙を最古に中世末の大溝から第1面の近世・近代の瓦枠井戸までのおびただしい量で、各遺構の切り合い関係も激しく、当地の活況を示す証左となっているが、このため遺物の混在も激しく、整理・検証を一層繁雑なものとしている。巻末の一覧表に出土遺物を記しているが、大部分の中世遺構に若干の近世遺物が、古墳・奈良期の遺構には中世遺物が混在しており、厳密な時期決定は極めて難かしい状況にある。

時期別には、古墳〜平安期の遺構が22基、平安末〜鎌倉期が96基、室町・戦国期が12基、近世・近代が38基となっており、平安末〜鎌倉期が全体の57%を占め、ことに平安末〜鎌倉初期間が82基と著しい集中を見せ、最盛期を示している。室町・戦国期は極端に減少し、井戸は一基も検出されておらず、生活面とは言い難い状況である。又、調査区を斜めに分断する16世紀代の掘削と考えられる大溝SD-004は現在までの調査例中最大規模であり、この有り様から該期には都市防衛の最前線地帯となっていた様である。SD-004は一部第1面で確認されたが、東半部で近世遺構の切り込みが著しく上端が不明確であったため、第2面で最終的に確認している。

出土遺物は弥生中期前半の甕棺片を最古に、釉裏紅壺・毛彫蓮花文高麗青磁碗・青白磁馬土 坏等の希少品を含む多量の古代~中世貿易陶磁器を検出しているが、総量がコンテナボックス に80数箱と、博多遺跡群内としては少ない量である。

## 表 1 博多遺跡群調査地点一覧(昭和63年3月現在)

## 公共事業関係

符号	調査番号	調査原因	所 在 地 (博多区)	調査面積(m²)	調査期間	備考
A	7 7 2 5	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.12~78.11	店屋町工区・『高速鉄道関係 V 博多(1)』1984 『高速鉄道関係 V 博多(2)』1986
В	7 8 3 3	1)	御供所町他	4,500	79.3~12	祇園町工区·『高速鉄道関係 VI 博多(3)』1987
С	7835	n	店屋町・上呉服町他	200	78.11~79.5	呉服町工区
D	7 9 4 9	n	博多駅前一丁目他	4,500	79.12~80.8	駅前工区
Е	8 0 3 7	11	上呉服町	100	81.3	呉服町換気塔
F	8038	"	冷泉町・祇園町	4 3 5	80.10~12	祇園駅2·3号出入口·『高速鉄道関係IV博多(1)』1984
G	8 1 4 8	"	御供所町	7 0	81.9	祇園駅 4 号出入口
Н	8 1 4 9	n	祇園町	184	81.10~11	祇園駅 5 号出入口
I	8 1 5 0	"	上具服町 · 中呉服町 綱場町 · 店屋町	3 8 0	81.4~5	呉服町出入口
J	8 4 3 5	"	博多駅前二丁目	2 1 5	84.4	祇園駅P2出入口
K	8 2 2 4	道路拡幅	上呉服町	6 3 0	82.11~83.3	築港線1次
L	8 3 3 1	"	ŋ	5 6 4	84.2~9	築港線 2 次
M	8 4 0 4	"	n	4 1 7	85.2~12	築港線 3 次
N	8 5 2 7	n	御供所町	3 8 3	85.12~86.6	築港線 4 次
0	8 6 5 3	n	n	3 8 0	86.10~87.2	築港線5次

## 民間事業関係

2011						
次	調査番号	調査原因	所 在 地 (博多区)	調査面積(m³)	調査期間	備考
1	7 8 1 0	納骨堂建設	御供所町・東長寺境内	3 6 0	78.11~79.1	本調査
2	7 9 2 8	ビル建設	店屋町99	約100	79.4	立会、上層図作成
3	7 9 2 9	納肯堂建設	祇園町・萬行寺境内	2 4 0	79.11	本調査
4	7 9 3 0	ビル建設	冷泉町7-1	1,100	79.12~80.3	本調査『博多』1981、『博多II - 図版編』1982
5	7 9 3 1	"	下呉服町346		79.12	試掘調査地表下4.5mから碇石出土
6	7 9 3 2	. 1)	冷泉町155他	6 4 0	80.3 $\sim$ 4	本調査
7	8 0 2 3	η	祇園町130	2 1 0	80.6~8	本調査
8	8 0 2 4	本堂建設	御供所町・東長寺境町	600	80.8~10	本調査
9	8 0 2 5	ビル建設	下呉服町75		80.9	試掘調査
10	8 0 2 6	11	冷泉町474-9	5 4	80.12	本調査『博多 I 』1981
11	8 0 2 7	11	御供所町 3 - 30		80.12	試掘調査
12	8 1 2 7	"	中呉服町152・153		81.6	試掘調査
13	8 1 2 8	11	駅前1丁目121~127		81.7	トレンチ調査
14	8 1 2 9	11	店屋町4-15	2 5 5	81.8	本調査
15	8 1 3 0	駐車場建設	上呉服町569	1 0 0	81.8	試掘調査
16	8 1 3 1	ビル建設	店屋町246~248	150	81.9	本調査
17	8 1 3 2	"	駅前1丁目98	910	81.11	本調査『博多Ⅲ』1985
18	8 1 5 6	"	駅前2丁目8-14		82.1	試掘調査
19	8 3 2 3	社務所建設	櫛田神社境内	2 0 0	83.4	本調査
20	8 3 2 4	ビル建設	駅前1丁目99	980	83.4	本調査『博多Ⅲ』1985
21	8 3 2 5	"	駅前1丁目18-1	150	83.5	本調査『博多Ⅲ』1985
22	8 3 2 7	n,	冷泉町189他	8 4 0	83.9	本調査『博多III』1985
23	8 3 3 4	本堂建設	龍宮寺境内	約300	84.2	本調査
24	8 4 3 3	ビル建設	冷泉町1-1	2 5 0	84.4 $\sim$ 5	本調査
25	8 4 3 4	"	祇園町1-1	100	84.5~6	本調査『博多V』1985
26	8 5 0 6	"	上呉服町34	1 3 4	$85.5 \sim 6$	本調査『博多 VI 』1986
27	8 5 0 7	11	祇園町1-11	3 5 0	85.5 ∼ 6	本調査『中部地区埋蔵文化財報告書第II集』1987に併載
28	8 5 0 8	n	御供所町70-2	1,800	85.5∼8	本調查『博多Ⅶ』1987
29	8 5 0 9	11	綱場町22-67	3 3 0	85.7~9	本調査『博多 <b>Ⅷ</b> 』1987
30	8 6 0 5	11	御供所町36・37・38・39	4 9 5	86.5~7	本調査『博多 <b>Ⅸ</b> 』1987
31	8 6 0 6	"	御供所町65・66	190	86.5~7	本調査『博多 X 』1987
32	8 6 0 8	11	祇園町21-1	約1,000	86.5 $\sim$ 7	本調査
33	8 6 1 8	"	祇園町8他	7 7 6	86.7~11	本調査『博多11』1988
34	8 6 4 5	"	冷泉町238-2他	4 0	86.10~11	本調査
35	8 6 4 8	"	上呉服町56	6 5 5	86.11~87.5	本調査『博多12』1988
36	8 7 2 5	11	祇園町42他	6 4 4	S 62. 2~10	本調査
37	8 7 4 0	"	博多駅前1丁目129他	1,427	S 62.12. ~ 3 調査中	本調査

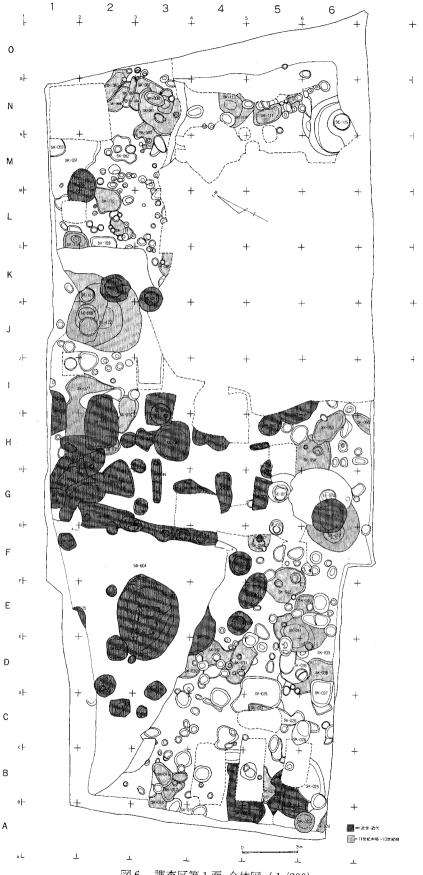


図 6 調査区第1面 全体図 (1/200)

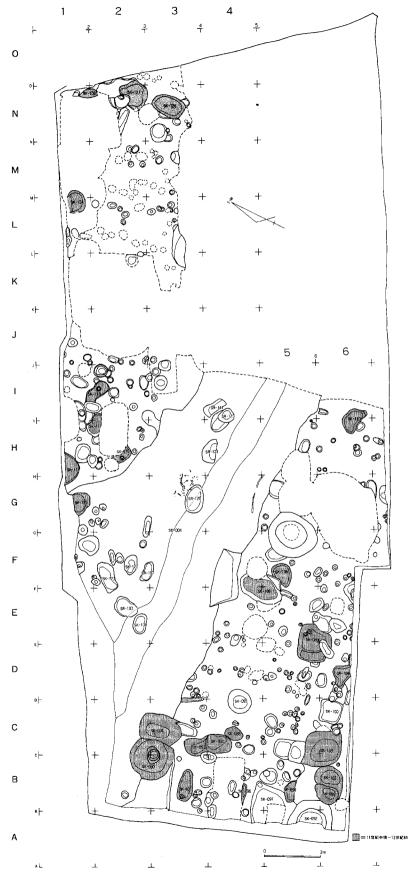


図 7 調査区第 2 面 全体図 (1/200)

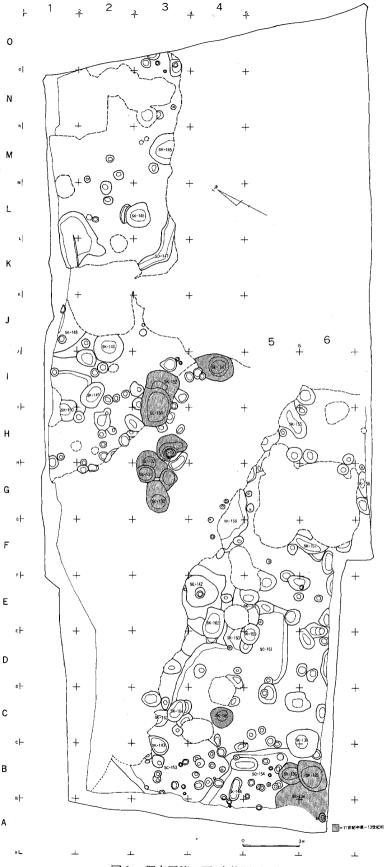


図 8 調査区第 3 面 全体図 (1/200)



図9 調査区第1面全景(北東より)



図10 調査区第2面全景(北東より)



図11 調査区第3面全景(北東より)

## (1) 古墳~古代の遺構

第3面の基盤層上で竪穴式住居3戸・井戸1基・土壙16基・溝1条を検出している。分布に偏りは無い。時期別には古墳時代布留式併行期が5基・5世紀代が1基・6世紀後半1基・7世紀後半代が3基、奈良期前半が4基・後半が4基、平安前期が2基であり、奈良時代に一つのピークを迎え、平安時代前期に一気に衰微する。

 $SC-154(図14\cdot 15)$  は $B-4\sim 5$  グリッドに存し、大部分を攪乱されているが一辺5.60m を測かる方形の竪穴式住居で、西側をSC-153に切られる。長軸を $N-29^\circ-W$ の方向にとり、柱間は 2.3mを測かる。炉址は確認していない。内部より、床面から浮いた状態で土師器高坏・器台・坏等を検出している。時期は布留式併行期。

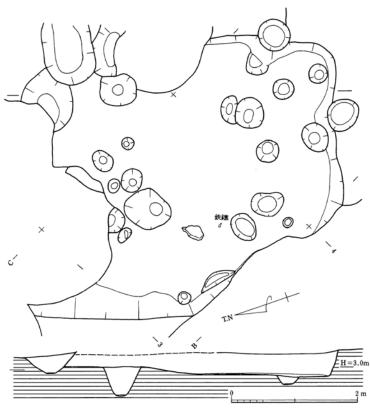


図12 SC-153実測図(1/60)



図13 SC-153 (南東より)

 $SC-161(図16 \cdot 17) は D \sim$  E-5 グリッドに存する。同様に大部分攪乱を受けているが、長 $4.14m \times 短3.12m \times$ 深0.49mを測かる方形竪穴住居である。長軸をN-64  $^{\circ}-E$ にとり、柱間は3.8mを測かる。北側の長辺中央部に焼土が残っており、竈と考えられる。内部からはVI期の須恵器・土師器を検出しており、7世紀後半代と考えられる。

② 井戸 SE-142(図18・ 19) はE~F-4グリッドに 存する。地盤が軟弱な砂のた め井筒に比べて掘り方は異様 H=3.0m に大きく、上端径4.58m・下 端径1.74m・深 1.2mの擂鉢 状を成している。井筒はこの 中央部にさらに径・深ともに 約30cmの小穴を穿がち、曲物 をすえている。最下段のみ木 質が残っているが、上部まで 数段重ねたものと思われる。 井底で標高1.47mを測かる。 掘方・井筒より布留式併行期 の土師器甕・高坏等を検出し ており、SC-154と同期と考 えられる。

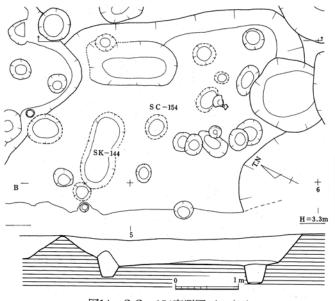


図14 SC-154実測図 (1/60)

図15 SC-154 (南西より)

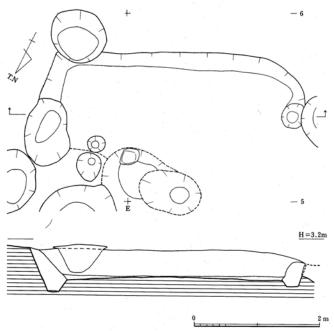
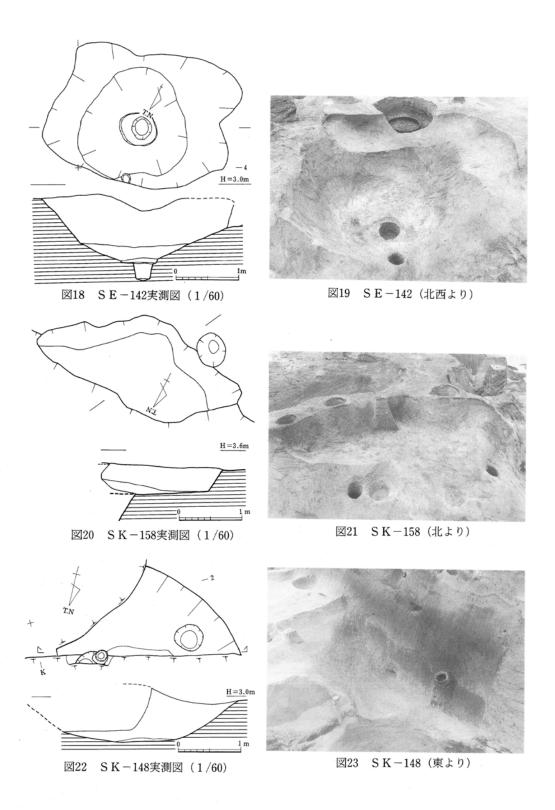




図16 SC-161実測図 (1/60)

図17 SC-161 (南東より)



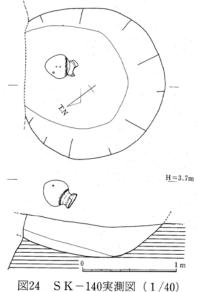




図25 SK-140 (北東より)

③ 土壙 土壙は古墳時代布留式併行期で3基、5世紀代で1基、7世紀後半代で1基、奈良期前半で4基、後半で4基、平安前期で2基確認している。大部分は廃棄物処理用のものと考えられる。

 $SK-158(図20 \cdot 21)$ は $F\sim G-4$  グリッドに存する。ほとんどをSD-004に切られているが残存部分で $3.2m\times 1.6m\times 0.47m$ を測かる。方形の形状から住居址の可能性も考えられる。内部よりVII期の須恵器・土師器が出土しており、8 世紀前半代が考えられる。

SK-148(図22・23)はJ-1グリッドに存し、 攪乱と調査区外のため 6 分の 1 程度の検出であるが、残存部分で $2.9m\times1.42m\times0.82m$ を測かる。内部より布留式併行期の土師器甕、高坏等を検出している。

 $SK-140( 図 24 \cdot 25)$  は  $I \sim J-2$  グリッドに存する。東端をSE-172に切られるが、長 $1.60 m \times$ 幅 $1.50 m \times$ 深0.43 m を測かる円形の土壌である。内部からは床面から $30 \sim 40 cm$  程浮いた状態で布留式併行期の甕と、山陰系の二重口縁甕の完形品を検出している。甕は暗褐色砂質土の包含層中から検出されたが、同層中では土壌の上端が確認できず、結局基盤層まで掘り下げて漸く確認した。甕が宙に浮いてしまっているが、土壌上端は数10 cm上方に有る。山陰系の甕は胴下半に穿孔がなされており、祭祠か墓の供献品が流れ込んだものと考えられる。

## (2) 古代末~中世の遺構

 $1\sim3$  面の全面にわたって検出しており、当調査区検出遺構の57%を占め、主体をなしている。殊に平安期末〜鎌倉初期間では81基の廃棄された遺構を検出しており、異様な集中度を示している。これが13世紀前半以降15基と減少し、さらに室町・戦国期には12基-このうち大溝と土壙墓を除いた日常生活関連の遺構は 4 基と激減し、当該期の井戸は 1 基も検出されていない。また、調査区を東西方向に斜断する形で検出された16世紀代の大溝 SD-004は、最大幅 9.8m・深さ2.7mを測かる堂々たるもの(巻頭図版 1)で、博多遺跡群内調査例中最大規模のものである。調査区内でこの大溝と同時期のものは、北側に12m程離れた地点に土壙が 1 基(SK-061)が有るのみで、居住空間とは言い難い状況を呈している。溝内には一時期土壙墓群が営なまれ、これらの有り様から、16世紀代には市街地のはずれ、都市防衛の最前線地帯にと変容している。

種別では、平安末〜鎌倉初期で井戸12基・土壙70基、13世紀前半〜14世紀前半で井戸4基・ 土壙11基、室町期で土壙2基、16世紀代で大溝1条・土壙墓6基・土壙3基を検出している。

#### ① 大溝 S D - 004(図26~28)

一部第1面で検出していたが、東半部が近世遺構の切り合いで上端が不明確であったため第2面で最終的に確認している。東端部分が現代の地下構造物で攪乱され欠失しているが、残存長27.3 $\mathbf{m}$ ・上端幅 $6.1\sim9.8\mathbf{m}$ ・下端幅 $0.8\sim1.7\mathbf{m}$ ・深さ $2.7\sim2.5\mathbf{m}$ ・基底標高 $1.5\mathbf{m}$ を測かる。主軸は $\mathbf{N}-92^\circ-\mathbf{E}$ をとり、底面は西端が東端より $20\mathbf{cm}$ 下がっており、水は東から西に流れていた様である。基盤が砂層のため崩れやすく、特に北西側は大きく崩れて幅 $9\mathbf{m}$ を越えているが、東端部での上端幅 $6.1\mathbf{m}$ ・下端幅 $0.8\mathbf{m}$ ・深 $2.7\mathbf{m}$ の逆台形の形状が本来の姿に近いと思われる。

層位(図27)は、1層一暗茶褐色砂質土で暗灰〜暗褐色土のブロックを多く含む深さの6割方を占める客土層。2層一暗灰褐〜暗褐色土の自然堆積層で比較的薄く部分的な堆積のため、遺構掘削時での分離ができず、1層土と同時に掘り上げている。3層一暗褐〜黒灰色粘質土と黄灰色砂との互層からなる自然堆積層で大溝の改削後の堆積層である。4層一暗褐〜黄灰色砂の自然堆積層で、5㎜前後の小礫まで流れており、かなり早い水流であったと思われる。溝内の土壌墓はこの上位より掘り込まれている。

出土遺物は、釉裏紅壺・青白磁馬上坏・翡翠釉碗等の希少品を包む多量の貿易陶磁が出土しており、7割以上を11・12世紀代の遺物が占める。しかし、最下層から1層まで、森田編年E群の白磁類(森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究Na 2 1982)、小野編年明染付B・C群(小野正敏「14~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」同上)、上田編年CII・BIV・BIV′類の青磁(上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」同上)、備前IV・V期の擂鉢・甕等の15・16世紀代を示す資料が少量だが万遍なく出土しており、上下間で時期差は認められず、16世紀代中に掘削・改削・整地されたと考えられる。

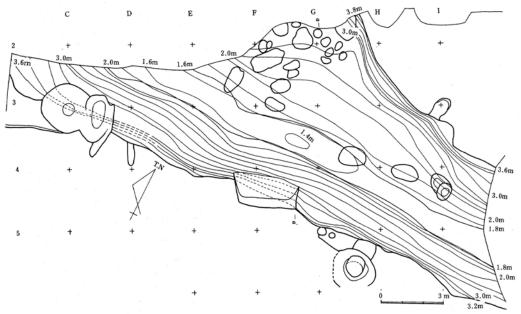


図26 SD-004地形図 (1/180)

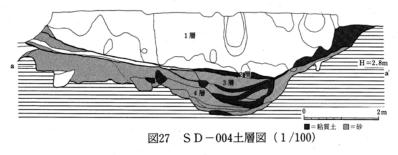
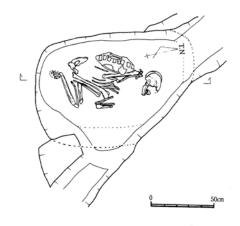




図28 SD-004土層断面(南西より)



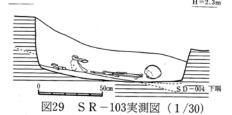




図30 SR-103 (南より)

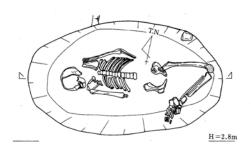




図31 SR-120実測図(1/30)



図32 SR-120 (北より)

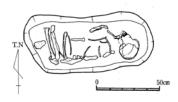
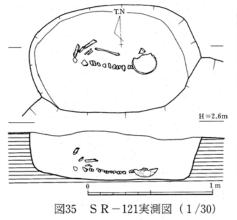


図33 SR-107実測図 (1/30)

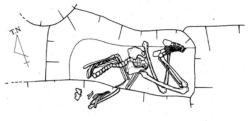


図34 SR-107 (北より)





5 SR-121実測図 (1/30) 図36 SR-121 (南より)





M=2.8m

0

1

図37 S R - 141実測図 (1/30)

図38 SR-141 (南より)



図39 SR-119 (東より)

## 土壙墓

SD-004内4層及び基盤層より 6 基の土壙墓を検出している。溝の主軸に  $\_$ 沿ってほぼ一直線にならび、SR-103 が頭位をこれに直交させる以外は皆、頭位も主軸に沿っている。

図40 SR-119実測図(1/30)

SR-103(図29・30-1号人骨)はE-2 グリッドに存し、 $1.20\times0.74\times0.59$  m、 基底標高 1.62 mを測かる不整円形の墓壙である。頭位をN-13°-E にとり、被葬者は左側臥屈葬で、成~熟年の女性である。

SR-107(図33・34-2号人骨) はF-2 グリッドに存し、 $1.11\times0.49\times0.22$ m、 基底標高 1.80mを測かる隅丸方形の墓壙。頭位を $N-90^\circ-E$ にとる右側臥屈葬で被葬者は成年男性である。

 $SR-120(図31 \cdot 32 - 3$  号人骨) はG3 グリッドに存し、 $1.51 \times 1.00 \times 1.15m$  ・基底標高2.25 mを測かる楕円形の墓壙で溝底から $40 \sim 50$ cm上位の4 層中に有る。頭位を $N-102^\circ$  - Wにとり、被葬者は仰臥屈葬の成年女性である。溝が改修された事を示す証左の一つとなったもので、右前腕の大半、右大腿・胫・腓骨を欠き、残存している右尺骨が上に立ち上がっていることから、

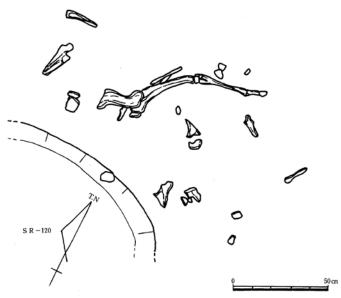


図41 SD-004・3層内馬骨出土状況 (1/20)

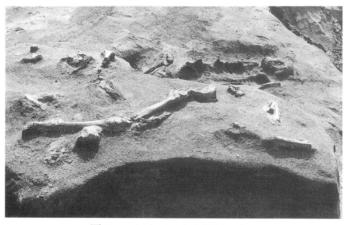


図42 3層内馬骨出土状況(北より)

後世の攪乱によるものと考えられる。実際層位的にはこの部分のみが台状に残されており、溝改修時に人骨を破壊して墓に気付き、そのまま残したと思われる。

 $SR-121(図35\cdot36-4号人骨)$ はH-4グリッドに存し $1.31\times0.76\times0.42$ m・基底標高2.10mを測かる隅丸方形の墓壙で、南側の一部を削平されている。頭位を $N-100^\circ-E$ にとる右側臥屈葬で被葬者は性別不明、熟年である。

SR-141(図37・38-7号人骨)はI-4グリッドに存し、1.24×0.50×0.32m・基底標高2.34mを測かる方形の墓壙で、南側を削平され、このため左上半部の大半が溝内に流出している。頭位をN-85 -Wにとる俯臥屈葬で、被葬者は熟年男性である。

S R-119(図39・40)はS R-141の南60cm程の位置に有る0.85 ×0.71×0.46mを測かる円形の 墓壙で、内部の頭蓋骨はS R-141が攪乱を受けた際に流出した

もので、溝改修時に改葬したか、自然に流出したものが窪地に入りこんだものであろう。

以上、墓の状態から、大溝が自然堆積で半分程埋まって窪地となった段階(4層)で営なまれ、/ 数年か数十年後の溝の改修により破損されたと推察される。

馬骨(図41・42)G-3グリッドの3層中、SR-120の上位で検出した。詳細は付編(2)を参照されたいが、鹿児島大学農学部・西中川助教授の鑑定によると、出土しているのは馬の左前肢で上腕から中節骨までの一連のものと、櫃骨・尺骨・手根骨・中手骨・基節骨等で2個体分以上の馬骨であると推定される。中手骨の最大長から、130cm程の体高を有するウマであることが想像され、現生の御崎ウマと同程度の中型馬と考えられている。

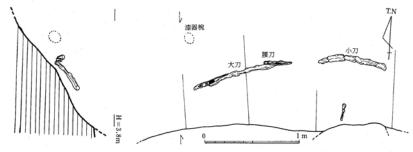


図43 SD-004内日本刀出土状況 (1/40)

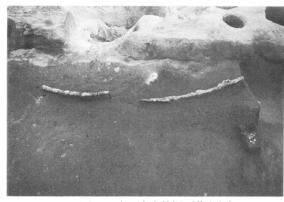


図44 日本刀出土状況(北より)

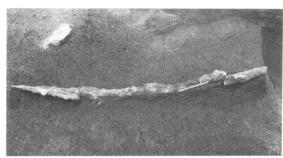


図45 日本刀-大刀・腰刀(北より)



図46 日本刀-小刀(北より)

#### 日本刀 (図43~46)

大溝内のG-4グリッド、 $1\sim2$  層間にかけて、溝の主軸に沿って一直線に直列した状態で大刀1振・小刀1振・腰刀1振と銅製の笄2本を検出している。大刀・小刀ともに溝南側の上端から内側へ $0.4\sim0.8$ m、下へ $0.9\sim1.2$ mと同軸線上に位置しており、同時に処理されたものと考えられる。さらに大刀の内側50cmの地点で朱塗りの椀を2個重ねた状態で検出しており、刀に供判するものと考えられる。ともに掘方・木箱の残存は無く、直に埋められている。

大刀は全長98cmで、黒塗りの鞘の一部が残っている。鍔の両側に小柄のかわりに21.5 cmの銅製笄を2本差している。体部の木葉文様が大刀の目貫と同様であり、当初からセットとして作成されたものである。大刀の下側には30cmの腰刀が重なっている。小刀は全長73cmで大刀同様黒塗りの鞘が残存している(巻頭図版)。拵は大刀に類似しているが目貫は草花文様でこれとは異なっており、類似品で腰物一揃えとして大溝の整地時に埋納されたものと思われる。

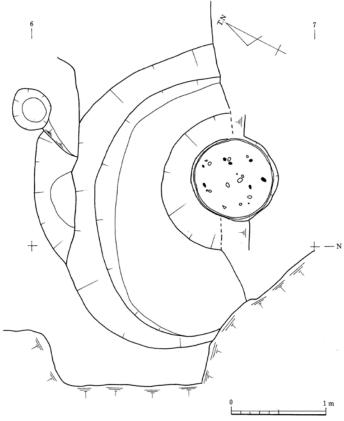


図47 SE-115実測図 (1/40)



図48 SE-115 (北東より)

## ② 井戸

井戸は平安末期~鎌倉初期で 12基、13世紀前半~後半期間に 廃絶されたものは4基を数える。 前代のものの分布は、F~K-2~4グリッドの範囲に12基中 9基が集中し群を成しており、 この外側15~20mにSE-090・ 134・012の3基がほぼ直角にそ れぞれ10.5m、16.8mの間隔で 分布しており、また、090と集中 部分がN-60°-E・間隔が16.5m、 134と012がN-59°-Eと平行す る軸線上にあり、敷地の単位を 示している可能性がある。

後代ではG-5~6グリッド に3基が集中し、これの東側22.4 mの位置にSE-115が分布す る。011と115との軸線はN-63° -Eをとり、前代に近い数値を 示している。

構造はSE-115・166(図47 ~51) が典型で、径 2~3 m前後 の円形の掘り方の底にさらに0.5 ~1.0m前後の小穴を穿がって底 を抜いた木桶を井筒として据え たもので古墳期同様これを数段 重ねていたと考えられる。現在 の湧水点は標高 1.1m程である が、当時は数十cmは高かった はずで、井底は前代で大部分が 1.3m代、後代で1.05~1.47mを 測かる。

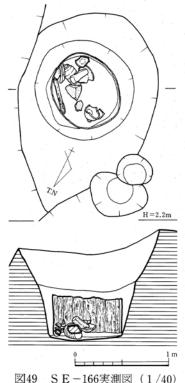


図49 SE-166実測図 (1/40)



図50 SE-166 (南東より)



図51 SE-166井筒内(南東より)

SE-115(図47・48) はN-6グリッドに存し、径3.15mの掘方に径85cmの木桶を井筒とし て据えている。井底は標高1.15mを測かり、 $2\sim3$ cm程の円礫が敷きつめられている。出土遺 物より、13世紀後半~14世紀初頭にかけ廃棄されている。

SE-166(図49~51) はI-4グリッドに存し、径3.18mの掘方に径80cm程の木桶の井筒を もうけている。井底は標高0.93mを測かり、内部に完形に近い白磁碗・中国陶器C群短頸膏。 四耳壺等が投棄された状態で出土している。時期は12世紀中頃~13世紀初頭。

#### ③ 土壙

土壙は平安末期から鎌倉初期にかけて70基、13世紀前半から14世紀前半の鎌倉期末の間に廃 絶されたものが11基、室町・戦国期で5基確認しており、11世紀中頃から13世紀初頭にかけて 最盛期を迎えている。

調査面積の半分近くを大溝SD-004と攪乱で失なっているため厳密に判断できる状態では ないが、遺構の分布状態は鎌倉前期~末で南部に、室町戦国期に大溝北側に集中する様で、他 は万遍なく分布しており偏りは無い。

戦国期の $SK-122 \cdot 123$ は土壙墓の可能性が考えられるが、ほとんどが廃棄物処理用と思わ れ、遺物の出土状態も遺物の小片がばらついて散在するものが大多数を占めており、今回の調

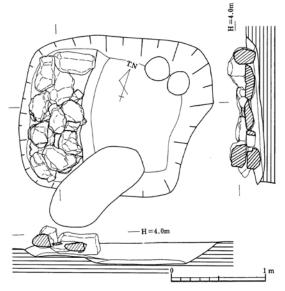


図52 SK-089実測図 (1/40)

図53 SK-089 (南東より)

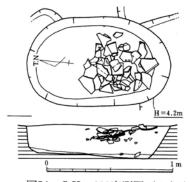


図54 SK-009実測図(1/30)



図55 SK-009 (北東より)

査では完形に近い資料を一括投棄している例はSE-166以外確認されていない。

SK-089(図52・53)は第2面C-2グリッドに存し、 $2.22\times2.05\times0.37$ mの方形の掘方内に 石室状に石を組み込んだ遺構で、東半分は攪乱で欠失している。火熱を受け赤変した石を用い ており、内部には灰が薄く堆積していた。時期は12世紀中頃から13世紀初頭の間である。

SK-009(図 $54 \cdot 55$ )は第1面N-3グリッドに存し、 $1.15 \times 1.04 \times 0.74$ mを測かる。北半部 を掘り過ぎてしまっているが、上面に多量の平瓦片が投げ込まれている。12世紀中頃から末の 間に廃棄されている。

## (3) 近世・近代の遺構

第1面より近世で3基の井戸と30基の土壙・埋甕・1条の溝と、近世から近代にわたる井戸

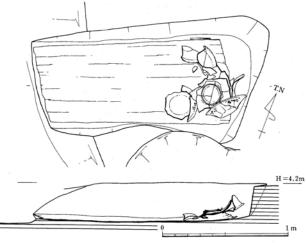


図56 SK-005実測図(1/30)

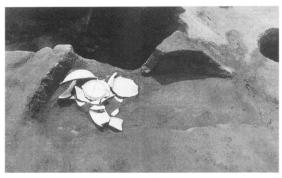


図57 SK-005 (北西より)

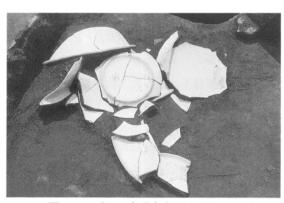
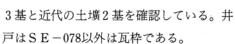


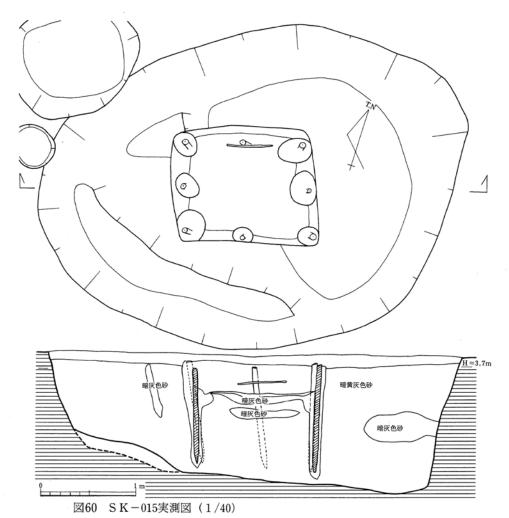
図58 イギリス白磁出土状況(北西より)



SK-005(図56~59) はG-5グリッド に存し、長1.80×幅0.80×深0.31mを測か る不整方形を呈する土壙である。長軸をN -68°-Eにとる。床面に7~8枚の薄板を 敷いているが、腐朽が著しく、木質が半分 泥状となって残るのみである。外側に一部 角材状のものが残っており木箱を成してい た可能性も有る。東部に、一部を床面に接 した状態で2個体分の破壊されたイギリス 製白磁盤が出土しており、これは完形に復 原された。口径38cm・器高12cmを測かる。 同笵の型成形によるもので、口縁下外面に パルメットの装飾が鋳出されている。外底中 央には銅版転写による窯印が印刷されてい る(図59)。他に1700年代~1780年代の伊万 里製の紅皿を供伴しているが、銅版転写の 手法から19世紀中頃以降の製品と考えられ る。



図59 イギリス白磁窯印



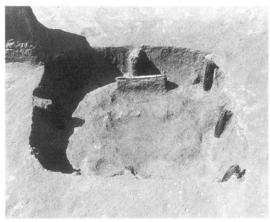


図61 SK-015内部(南東より)

SK-015(図 $60\cdot61$ )はE-3グリッドに存し、主軸をN-74°-Eにとる。 $4.70\times3.25$  $\times2.21$ mの楕円形の掘り方と $1.52\times1.40\times0.42$  mの方形の枠からなり、方形内部主体部の辺に沿って径6cm程の丸太杭が6本打ち込まれており横板と組み合わせて土留を成していたと思われる。内部には暗灰色砂が薄く堆積し底面と杭周辺には鉄分が $1\sim2$ cm沈澱しており、水溜遺構と考えられる。掘方及び内部より18世紀代の伊万里染付碗等が出土している。

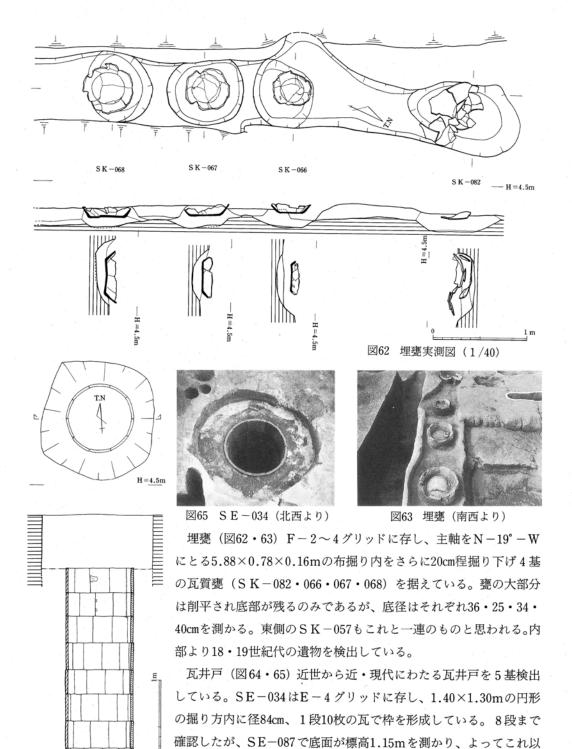


図64 SE-034実測図 (1/40)

下は当時の湧水点にあたる様で、木桶になる可能性がある。

# III. まとめ

#### 古墳~古代の遺構

第3面を中心に古墳前期布留式併行期の竪穴住居1戸・井戸1基・土墳3基を確認、5世紀代の土墳1基、6世紀後半代の溝1条、7世紀後半代の竪穴住居2戸、土墳1基、奈良前半代の土墳4基、後半代の土墳4基、平安前期の土墳を2基確認しており、比較的濃厚な分布を示しており、奈良期に一つのピークを迎え、平安前・中期は衰微している。

# 古代末~中世の遺構

1~3面全てにわたって108基の遺構を検出し、殊に12世紀中頃~13世紀初頭の間に廃棄された遺構は82基にのぼり、全体の48.8%を占め、異様な集中度を示している。これが13世紀前半以降15基と減少し、さらに室町・戦国期の日常生活関連の遺構は4基と激減する。中国明代、茅元儀の『武備志』日本考(天啓元-1621年成立)によると法事熟機の廂先に「有一街 名大唐街 唐人留彼相伝 今尽為倭也」と、居留朱商人による「大唐街」という町がかってあったと述べ、また『散木奇謡集』六に永長2(1097)年閏正月六日、大宰権師源経信が死亡した時、「博多にはべりける唐人どもあまたまうで来てとぶらひける」と記してあり、11世紀の終わりにはすでに「大唐街」形成の傾向は明らかであったと考えられており(川添昭二「古代・中世の博多」『中世九州の政治と文化』)、この「大唐街」が仁平元(1151)年、大宰府官人五百余騎によっ

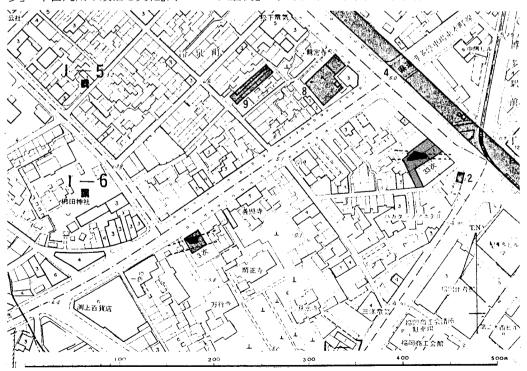


図66 博多3次(万行寺)・33次(三井)大溝位置(1/4000)

て大追捕を受け、1600家あまりの宋人の資材が略奪されるという事件が起こっており、調査の結果はいみじくも此等の経緯に符合している。

16世紀代に掘削・改修・整地されたと思われる幅 $6.1\sim9.8$ m、主軸を $N-92^\circ$ -Eにとる大溝 SD-004を検出した。遺跡群内調査例中最大規模のものである。今までの調査成果により、条 坊制によると思われる東西南北方向の溝は14世紀前半に廃棄され、 $N-30^\circ\sim42^\circ$ -Wの町割に移向し、16世紀代に現町割方向にと移向していく結果が得られているが、この大溝の方向は例外的である。他に3次調査(万行寺納骨堂)において $N-78^\circ$ -Eと近似した方向をとる16世紀代の溝の北半分が検出されている(図66)。

貝原益軒の『筑前国続風土記』(元禄16-1703年)によると「又南の方の外郭に、横二十間餘の堀の跡ありて、瓦町の西南のすみより、辻堂の東に至る。是南方の要害の固なり。其土堤今もあり。比堀を房州堀と虎す。臼杵安房守鑑賡といひし人ほらせたる故なりという。然れば元亀天正の比、始めて堀しなるへし。或は其前大内家守護の時よりも、此要害有しを、臼杵氏修補せしにや、いまた詳ならず」と有る。石垣普請伺下絵図(図 2)には明瞭に図示されており、文化9(1812)年の古図(図 4)には古屋堀として示され、明治24(1891)年『福岡市全図』(図67)にも町の境界線と重なって痕跡が伺がえる。調査地点はこれより北西へ150m程離れている。地図で見る限り、房州堀は現町割に沿っており、この大溝の方向とは異なっている。大溝内の出土遺物は11・12世紀代のものが7割以上を越えており、この時期の溝を完全に掘削し切って16世紀代に改削された可能性も考えられるが、この溝に大幅に削平されてもなお全量の5割近くを占める遺構の密度からして、この程度の遺物の混入も妥当と考えられるし、該期から鎌倉期にかけての井戸の分布の軸方向はN-60°~63°-Eと30°近くのずれがあり、この溝に沿っていない。今後ともに大きな課題であるが、16世紀代を示す出土遺物の時期・遺構の規模・文献中の修補の

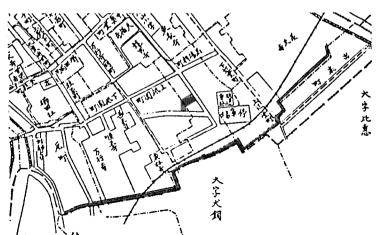


図67 『福岡市全図』明治24(1891)年 (1/10000) アミカケは調査区略位置と「房州堀」痕跡

文との一致等より、元亀 2(1571)年大友氏による 「房州堀」・「矢倉門」とと もに、大規模防衛線整備 の一貫として改削され、 天正15(1587)年の太閣町 割で整地された可能性が 有力と思われる。

# 付編(1) 博多遺跡群第33次調査出土の中世人骨

中橋孝博·永井昌文(九州大学医学部解剖第二講座)

#### はじめに

福岡市博多区祇園町8において、昭和61年7月から11月にかけてビル建設に伴なう発掘調査が実施され、計6体の中世人骨が出土した。当遺跡は、古墳時代前期から近世にいたる遺物、遺構を含むが、人骨は現地表下約3m、溝状の窪地に営まれた中世期の墓地から出土したものである。残念ながら骨の遺存状態が非常に悪く、その形態的特徴を十分には知り得なかったが、「博多」からはこれまでのところわずかに3体の中世人骨(中橋・永井、1986・1987)しか出土しておらず、貴重な追加資料となるものであり、以下、その知り得たところを概括しておく。

#### 1. 出土・保存状況、所属年代

溝状遺構の埋没後の窪地に営まれた墓地から検出されたものであり、散乱人骨である6号人骨を除き全て土壙墓内より出土している。いずれも砂層中に掘られた土壙であるが、その砂がやや粗く、かなりの有機物を含んでおり、また、16世紀末頃の溝改削によってかなりの撹乱を受ける等、悪条件が重なったために骨の保存状態は極めて不良である。骨質が非常に脆弱化し、補強液等の使用にもかかわらず、取上げ後の復元も一部を除きほとんど不可能な程に歪みが著しく、細片化している。

所属年代は出土遺物の考古学的検証より16世紀の、室町時代のものと考えられている。

## 2. 所見

出土人骨を表1に示す。

## 2-1、1号人骨(女性、成~熟年)

左側を下にした側臥屈葬で、頭片の他、上、下肢、肋骨、骨盤片を認めるが、いずれも細片 化している。

性別、年齢に関しては上記のような遺存状況のため正確な判定が困難であるが、わずかに原形をとどめている大腿骨片の太さからみて女性である可能性が強い。また、歯が一部かなり摩耗しており、成年の後半から熟年期にかけての人骨とみなされる。

#### 2-2、2号人骨(男性、成年)

出土時の観察所見から、右側を下にした側臥屈葬とみなされ、実質上、部位同定が可能なの は歯のみである。

以下にその歯式を示す。

# M<sub>3</sub> / P<sub>2</sub> P<sub>1</sub> C I<sub>2</sub> I<sub>1</sub> I<sub>2</sub> C P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> M<sub>2</sub> M<sub>3</sub> M<sub>2</sub> M<sub>1</sub> / P<sub>1</sub> C I<sub>2</sub> I<sub>1</sub> / C P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> / M<sub>2</sub> M<sub>3</sub> (/: 欠落, · : 遊離南)

大歯、あるいは大臼歯のサイズが比較的大きく、その計測値からみて男性である可能性が強い。また、咬合面の摩耗がかなり弱く、第3大臼歯にわずかながら摩耗が認められることから成人には達していた可能性が強いが、いずれにしても20才前後のごく若い人骨と推定される。2-3、3号人骨(女性、成年)

ほぼ仰臥し、膝関節を強屈した姿勢で見出された。右大腿骨、胫骨、腓骨、及び右前腕骨等は撹乱を受けて失なわれている。当遺跡出土の中世人骨の中では7号人骨と共に比較的残りのいい方であるが、歪みが著しく、細片化し、頭蓋冠の一部を除いて、復元、観察は不可能であった。

性別、年齢については、まず骨盤の大坐骨切痕の開きや、頭蓋各所の筋付着部の発達度から みて、女性とみなされ、また、歯の咬耗が比較的弱く、頭蓋の主縫合がいずれも開離している ことからみて、2号人骨程ではないがかなり若い成年人骨とみなされる。

観察所見として、頭蓋では上面観においてかなり頭幅の狭い特徴がうかがえ、頭長が不明ではあるが、強い長頭傾向が認められる。また上腕骨では、取上げ後の乾燥にともなう縮少を考慮に入れてもなお、かなり細く、やや扁平性の強い特徴もうかがえる。

## 2-4、4号人骨(性別不明、熟年)

出土時の観察所見から、右側を下にした側臥屈葬であったと推定される。保存状態が非常に悪く、頭小片の他は消失している。

上記の様な状況のため、性別の判定は不可能だが、歯片の咬含面の観察所見から、恐らくは 熟年に達した遺体と思われる。

#### 2-5、6号人骨(男性、成人)

当人骨は、撹乱を受けて溝状遺構中より散乱した状態で見出されたものであり、比較的残りのよい左大腿骨と上腕骨片を認める。

大腿骨の骨幹周は約87㎜で、筆者らの保存不良骨に対する性判定法(Nakahashi and Nagai. 1986)から、男性である可能性が示唆された。

骨体が変型しているので正確な示数は得られないが、特徴として粗線の発達が弱くかなり 矢状径の小さい、いわゆる柱状大腿骨とは対照的な骨幹断面型をみせている。

#### 2-6、7号人骨(男性、熟年~)

右側を下にした、ほとんど俯臥に近い姿勢で見出された。また、撹乱を受けて、当人骨のものとみなされる頭骨はやや離れた位置に遊離した状態で検出されている。

3号人骨と共に比較的多くの全身骨が遺存しているが、変型が著しく、その形態的特徴を知

#### ることはできない。

性別は四肢骨片の太さから男性である可能性が示唆され、また、上顎片の歯槽部がかなり閉鎖しているので、少くとも熟年以上の、かなり高齢の人骨と推察される。

#### 3. 総括

以上、博多遺跡群第33次調査で出土した中世人骨は、骨の遺存状況が非常に悪く、その形質状の特性を明らかにすることができなかったが、この遺跡における中世人の埋葬姿勢として側臥屈葬の頻度が高い点や(5例中3例、7号人骨も側臥屈葬のやや変化したものとみなすと4例が側臥屈葬で埋葬されていたこととなる)、3号人骨の頭蓋に長頭傾向が認められ、以前の出土例を合わせて、当地の中世人もまたかなりの長頭性をその共通の特徴とする点等が確認された。博多のような古い歴史をもつ町の住民が、人類学上どういう特徴をもっていたのか、その形質の時代的な変化や地域的特性を明らかにすることは、天福寺近世人の報告(中橋、1987)の中でも触れたように、色々な問題点を含む今後の重要課題である。残念ながら今回の出土資料はその目的には不十分なものであったが、少しづつでもこうした資料蓄積の努力が続けられていけば、いずれ大きな成果に到達することも期待できよう。

(末筆ながら、当人骨研究の機会を与えていただき、色々と御教示いただいた福岡市教育委員会の各位に深謝いたします。)

## 文 献

中橋孝博、永井昌文(1986):博多遺跡群第26次調査出土人骨、博多VI、福岡市埋蔵文化財調査報告書、 144:20-21、福岡市教育委員会

T. Nakahashi, and M. Nagai (1986): Sex assessment of fragmentary skeletal remains.

J. Anthrop. Soc. Nippon 94: 289-305

中橋孝博、永井昌文(1987):博多遺跡群第28次調査出土中世人骨、福岡市埋蔵文化財調査報告、

147:121-123、福岡市教育委員会。

中橋孝博(1987):福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨、人類誌、95:89-106

表 1 博多第33次調査出土中世人骨

番号	性 別	年 齢	埋葬姿勢	遺存状態	備考
1	(女性)	成~熟年	左側臥屈葬	ほぼ全身骨をみるが 細片化、歪み著明	
2	(男性)	(成年)	右側臥屈葬	歯他、体部骨片	
3	女 性	成年	仰臥屈肢	ほぼ全身骨をみるが 細片化、歪み著明	長頭傾向
4	不 明	熟年	(右側臥屈葬)	頭骨小片、他	
6	(男性)	成 人	不明	左大腿骨、他	溝中より散乱 人骨として出土
7	(男性)	熟年~	俯臥屈葬	ほぼ全身骨をみるが 歪み著明	5 号人骨として取上げ られた頭骨と同一個体

# 付編(2) 博多遺跡群第33次調査出土の馬骨について

西中川 駿(鹿児島大学農学部)

#### はじめに

近年、奈良、平安から中世にかけて、全国各地から馬の骨や歯の出土が報告されている。また、芝田、直良は縄文、弥生および古墳時代に、全国で75ヵ所から馬骨、歯の出土を報告しているが、これらはすべてが当時のものかは、疑問がもたれている。最近、九州では佐賀県詫田西分貝塚、熊本県宇土城三ノ丸跡、上の原遺跡 $\Pi^6$ 、鹿児島県麦三浦貝塚から馬の骨や歯の出土が報告されている。

博多33次遺跡は、福岡市博多区祇園町8にあり、福岡市教育委員会が発掘調査を行い、16世紀の遺物の出土した遺構である。調査依頼された馬骨は、発掘当時は現形をとどめていたものもあったが、当研究室へ搬入されたときは、小骨片になったものが多く、可能な限り修復して、その形態を肉眼的、計測学的に検索し、日本在来馬のものと比較検討を行ったので、ここにその概要を報告する。

#### 1. 出土状況と出土骨量

馬骨の出土状況は、発掘担当者の加藤氏によると、東西に貫く幅  $9\sim6\,\mathrm{m}$ 、深さ $2.8\mathrm{m}$ の大溝の中層で、埋葬人骨の上層から検出されたという。出土骨の総重量は、 $431.6\mathrm{g}$  で、それらは前肢の、上腕骨 1 (左)、橈骨 4 (左 2 、右 2 )、尺骨 4 (2 、2 )、手根骨 6 (左)、中手骨 2 (1、1)、基節骨 1 (左)および中節骨 1 (左)個で、後肢は胫骨 1 (左)個のみであり、その他小骨片が多数みられる。橈、尺骨が左、右各 2 個ずつあることから少なくとも 2 個体以上の馬骨であることが推定される。

## 2. 出土骨の概要

測定可能な出土骨および日本在来馬の骨の計測値の比較は、表1に示した。

左側の前肢骨は上腕骨から中節骨まで同一個体のものである(図版Iの1~6参照)。

上腕骨は、外側を下にして、内側から圧迫された形の遠位1/2の保存骨で、その保存最大長は197.5mmで、修復された骨体中央径は38.9mmであり、これは現生のトカラウマより少し大きい。 横骨は左 2 、右 2 個の出土があり、 2 個体分のものと思われる。これらの骨もすべて圧迫され、変形しており、正確な計測値を得ることは出来ない。形状は在来馬に類似している。左側の橈骨の近位端の幅×径は、63.3×42.0mmで、不完全ながらトカラウマより大きな値を示している。

尺骨の左側の1例は、肘頭を欠如し、滑車切痕や橈骨との関節面を有するもので、滑車切痕の幅は19.7mmでトカラウマより大きい。他の3例は変形や欠損の多い標本である。

手根骨は、左側のみで、橈側、尺側、中間、第2、3、4 手根骨で、中間や第3 手根骨はほぼ完全な状態で出土しており、それらの幅×径は、それぞれ25.7×31.4、32.6×35.1mmである。

中手骨は、骨体の一部破損したものと(左)、遠位端の滑車の一部(右)の2標本で、左側のものの修復した最大長は214.4mmであり、これより林田らの方法で体高を推定すると、130cmの大きさであったことがうかがわれる。他の部位の計測値は表1に示した。

基節骨は、前肢の左側 1 個で、やはり内側が圧迫され、形は変形しており、それら計測値は 参考値として表 1 に示した。

中節骨は、前記基節骨と関節するもので、やはり変形している。

胫骨は唯一の後肢の出土骨で、遠位端関節部のみがみられ、幾分変形しているが、その幅と径は $55.2 \times 30.7$ mmで、これらはトカラウマ $(61.0 \times 52.2)$ より小さい。

#### 3. 考察

博多33次遺跡出土の馬骨は、2個体分の骨で、中手骨の最大長から、体高を推定すると、130 cm位を有するウマであったことが想像され、これは前記の詫田西分貝塚124cm、宇土城三ノ丸跡  $105\sim125$ cm、麦三浦貝塚120cmよりも大きく、また、現生の小型馬であるトカラウマ(雄114.9、雌114.5)より大きく、御崎ウマ(雄134.6、雌130.9)と同じ大きさの中型馬に属するウマであったことが考えられる。また、頭蓋や寛骨の出土がないので、年齢や性別を推定することが出来なかったが、骨端の閉鎖などから成獣であることは明らかである。

当時の馬は、すでに史実が示すように、乘馬や戦力として利用されていたと思われ、刀傷などがないことから、食用としたのではなく、死後埋葬されたものと考えられる。

#### 4. まとめ

博多33次遺跡出土の馬骨について調査した。

- 1) 馬骨の総重量は431.6gで、それらは上腕骨、橈、尺骨、手根骨、中手骨、基節骨、未節 骨および胫骨である。
- 2) 中手骨の最大長から体高を推定すると、130cm位で、現生の御崎ウマと同じ中型馬に属するものである。

#### 参考文献

- 1. 林田重幸:日本在来馬の系統に関する研究、1-180、中央競馬会、東京(1978)
- 2. 林田重幸ら:馬における骨長より体高の推定法、鹿大農学術報告、6、146-156(1957)
- 3. 直良信夫:日本および東南アジア発見の馬歯、馬骨、1-174、中央競馬会、東京(1970)
- 4. 西中川駿:宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について、宇土城三ノ丸跡、71-82、宇土市教育委員会(1982)
- 5. ル : 詫田西分貝塚出土の自然遺物、詫田西分貝塚、74-79、千代田町教育委員会(1983)
- 6. リ : 塚原古墳群(上の原支群)出土の馬歯について、上の原遺跡II、97-102、

熊本県文化財保護協会(1984)

7. n ら:古代遺跡出土の動物骨に関する研究 VI 鹿児島県麦之浦貝塚出土骨の概要、

鹿大農学術報告 37、105~113(1987)

8. 芝田清吾:日本古代家畜史の研究、1-248、学術出版会、東京(1969)

表1 出土骨および現代馬の骨の計測値

(mm)

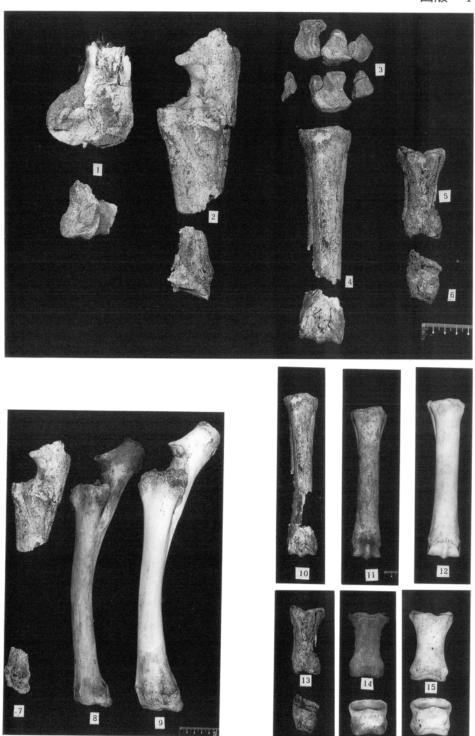
	上腕骨	橈	骨	F	Þ	手	骨		基	節	骨(前)
	骨体 中央径	近 fi 幅	立 端 径	最大長	近 幅	· 端 径	遠 (f 幅	立 端 径	最大長	近 幅	位 端 径
博多	38.9	L63.3	<u>42.0</u>	<u>214.1</u>	39.5	<u>31.9</u>	39.3	31.9	<u>78.3</u>	41.1	31.2
		R <u>49.2</u>	33.6								
33次		L <u>63.9</u>	<u>29.9</u>								
宇土城 三ノ丸跡				206.5	42.8	29.0	43.9	33.4			
トカラ 🌣	38.6±2.3	65.3±0.9	$41.5 \pm 2.2$	201.9±7.5	43.8±1.3	30.1±1.1	43.1±2.1	$32.5 \pm 0.5$	77.2±0.7	49.0±0.2	$32.7\!\pm0.9$
ウマ♀	33.6±2.2	61.5±2.7	$39.7 \pm 2.2$	199.3±5.5	$42.2 \pm 2.2$	$29.5 {\pm}1.5$	$41.1{\pm}2.2$	$31.5\!\pm\!1.3$	75.5±2.6	45.7±0.2	31.0±1.4
御崎☆	42.8±0.6	77.3±2.4	45.4±2.9	209.0±6.1	49.4±0.7	33.0±2.4	45.6±1.1	34.2±1.2	80.7±3.3	52.0±2.3	35.0±1.2
ウマ♀	43.9±2.3	79.7±1.8	46.3±2.3	218.5±9.6	$48.9 \pm 1.8$	33.1±1.6	45.9±0.9	$34.4 \pm 1.1$	82.7±1.3	50.8±2.1	36.0±1.2
サラブレ	49.7±3.1	89.7±4.7	55.5±4.7	266.1	59.8±3.2	41.2±2.1	59.3±2.8	43.5±1.4	103.8±5.3	64.1±3.5	44.3±1.8
ット種・P	47.9±2.3	86.4±3.9	56.9±1.7	268.8±9.7	59.0±2.1	39.7±1.6	57.2±2.5	42.1±1.7	102.4±0.8	59.8±1.4	42.0±1.8

一 不完全骨を意味する。

# 図版の説明

- $1 \sim 6$ : ウマの出土骨(左側)、7、10、13、16: 出土骨、5、11、14、17: トカラウマ、
- 9、12、15、18: 御崎ウマ
- 1. 上腕骨、2. 橈骨、尺骨、3. 手根骨、4. 中手骨、5. 基節骨(前)、6. 中節骨(前)
- 7、8、9 棟、尺骨(左)、10、11、12、中手骨(左)、13、14、15、基節骨(左)、16、17、18、中節骨(左)

図版 I



(註) ●時期は土師器(大等府編年)を中心に他の陶磁器・切り合い関係で決定し、廃棄時期を示している。 ●規模で、井戸は上段に井筒を下段に堀方を示し、溝は上端幅×下端幅×深を示している。 ●土師器法量は口縁全周の2分の1以上残在するもののみ示した。

<b>土節器・皿・坏法量</b> (口径×高) cm				国8.5~9.1×1.0~1.2	<b>Ⅲ</b> 9.2×1.0	∭9.1×1.1∼1.2		
出土海物	白磁 (徳田・N・N類、平底皿加類) 青磁 (龍泉徳川類、同安徳川類、寿蝟象嵌碗) 中国産陶器 (虚) 国産陶器 (備前他一擂鉢) 近世陶磁 (鉢、唐津二彩皿、白磁 小环、伊万里染付徳利、媚薬瓶) 土師器 (皿、环、甕、七輪) 石製品 (石墨・石板) 金属器 (銭) ガラス製運管	白磁(碗皿~Ⅵ・Ⅸ類,平底皿0類,八角小环,壺) 青白磁(皿) 青磁(龍泉碗1類,皿,同安碗1類,皿) 中国產陶器(盤,甕,皿,壺) 須恵器(坏,环蓋,高台环,甕) 瓦器(坑) 瓦質土器(擂鉢) 土師器(皿,坏,甕,盤,土鍋,壺) 瓦 石製品(石鍋) 金屬器(鉄針)	白経、青磁(碗) 中国産陶器(養,盤) 須恵器(环) 瓦器(物) 瓦質土器(鉢) 土師器(皿,坏,壺) 瓦	白磁(碗0・II~叫・IX精・高麗・ロンゲ、平底皿II・III、V~叫類、高台付皿I・II類、端 高行、及り・ロハケ皿・灯明皿、壺蓋、壺、水注、盤)青白磁(碗。皿、合子、小壺、香炉、八角 11 元 基金蓋 整 紙 同安施 II、 国	日磁(碗11~Ⅵ・区類、高台付Ⅲ 1類・平底Ⅲ II・Ⅲ・Ⅵ類・ロハケⅢ、壺、菊Ⅲ、小壺) 青白磁(碗2 台子、ロハケⅢ) 釉嚢紅(壺) 青磁(龍泉碗1・II・Ⅲ・۷類・小碗1 Ⅲ、同字碗1・II・Ⅲ・۷類・小碗1 Ⅲ、面接配 II、 11 平型 II 平型 II 中国盛陶器(茶种四耳 壶、四耳壶、長斯、西草、桑、北等、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、	白磁(砲川〜Ψ, K類, 端皮り, 徳化窯碗, 平底皿川・Ψ類, 高台付皿川類, ロハケ 皿、端反り皿、壺, 小壺) 青白磁(馬上环, 碗, 壺, 台子) 青磁(龍泉碗1・II: 川・V類 塞, 同安伽1・I類: 川・幸舞ニ島-再本, 粉粧碗。高額。 李朝蒙珠 徳、越磁的,明青花 (碗, 皿) 中国途間路( 皿, 鉢, 捏鉢, 四耳壺, 茶柿四耳壺, 短頸壺, 小口瓶, 綠林盤, 蟄 互度四器(備前他一擂鉢, 菱) 近世陶磁、須惠器(甕, 环, 天麓, 高台环) 瓦器(均) 方質土器(電, 擂鉢, 水合) 土師客(山, 环, 高水, 丸坯、稻、瀬、土, 土蝗石(省水) 弥生(甕) 瓦, 土蝗品(管状土篷, 瓦玉(青磁, 环)) 不製品(石織, 砥石, 诸石製品 竹小壺・水糞棒(北字 4年)) 金属器(鉄釘,鉄小板片,銭(元豊通宝他)) 墨書須惠 田, 自然遺物(骨)	白磁(破V類,皿) 青白磁(破)青磁(龍泉碗田類,同安碗田類,皿,小壺) 中国産胸器(体,長紙,菱紙,菱) 近世近代陶磁(イギリス白磁盤,伊万里紅皿) 須恵器(養,牙)瓦器(物) 瓦質土器(地) 上 金属器(鉄)	日孫(疏)N·V 類,平底皿/N類,春伊) 青白磁(合子) 青磁(龍泉版1·V類,同安範11類/皿) 天日碗 明青花(碗,皿) 中国產陶器(幾,四耳壺) 須惠器(號,高古牙,环) 瓦器(稅) 瓦寶土器(擂鈴) 土硝點(咀, K,數) 瓦 石製品(石鋼) 金属器(鉄釘)
規模長辺×短辺×深(底面標高) m	1.20×1.17×0.39(3.41)	1.49×1.13×1.03(3.28)	1.15×0.97×1.35(2.98)	9.8×0.8×2.7( )			$1.80 + \alpha \times 0.80 + \alpha \times 0.31(3.89)$	1.15×1.04×0.74(3.52)
時期(C=世紀)	近代	16C~17C	18C~19C	16 C			1900年頃	近世
本居国			-	1.2	の歴	4厘	-	
グリット	D-2	D-2	C-2	C-2~ I -5			G-5	D-3
通 本 No.	S K-001	S K-002	S K-003	S D-004			S K-005	S K-006

<b>土節器・皿・抔法量</b> (口径×高) cm		<b>Ⅲ8.9×0.9</b>						
出土造物	白磁(碗11~N·LX類,皿1·L1類,平底皿Ⅲ·V類,高合付皿Ⅱ類) 青白磁(皿,碗,合子) 青磁(龍泉碗1·II·N類,皿,稜花皿,同安碗1·I1類,皿,高髓碗) 天目碗明~清青花(碗) 中国雀陶器(甕,行平,盤,長點,小口瓶,鉢,四耳壺,綠釉盤) 国军陶器(擂鉢,甕) 近世隔磁(伊万里珠)转砲,花堡,孔花器,新面,紅面,色絵碗,清津。即毛目碗,二彩盤,関西茶碗,福网產陶器皿,6苑利,九州產陶器甕、福岡産果精柚水注、整) 須惠等(朝、江東建、區、江東、路) 近,至至等(據鉢、水舎) 東格奈建鉢 土師器(皿,环,高台环,建) 瓦,土製品(瓦玉(白磁-陶器-土師器)) 石製品(石鍋,砥石,磨石)。金属器(錢約1,銅銭,錢(寬永通宝他)) 墨書陶磁器	白磁(碗Ⅱ~Ⅵ・エス類,ロハグⅢ,高台付ⅢⅡ類,壺,香伊) 青白磁(合子,袋物) 青磁(龍泉碗 I・Ⅱ類・Ⅲ,同安碗 I・Ⅱ類・Ⅲ,高麓碗) 中国産陶器(Ⅲ,鉢,捏鉢,盤,甕,四耳壺) 国産陶器(鍍) 近世陶器(擂鉢) 須恵器(Ⅲ,甕,蓋,好,好蓋) 瓦器(物) 瓦賀土器(精鉢) 東播系捏鉢 土師器(Ⅲ,芍,壺,斃,土鍋) 瓦 土製品(瓦玉(白磁・瓦置)日磁・五製	白磁 (碗川·Ⅲ·V·叭類, 平底皿川·V/類) 中国産陶器 (甕, 壺) 国産陶器 (甕) 須恵器 (皿, 坏, 坏蓋, 變) 上師器 (皿, 囊) 瓦·博 金属器 (鉄釣)	白磁(碗II~N·IX類, Ⅲ, 壶, 合子) 青白磁(碗) 青磁(龍泉碗1類, 同安碗1・II 類, Ⅲ) 天目碗 中国産陶器(盤, 甕, 壺, 鉢, 四耳壺, 捏鉢) 須恵器(甕, 坏, 坏蓋, 高台水、壺) 瓦器(饱) 瓦質土器(外、壺) 東椿永柱鉢 上師器(Ⅲ, 上鍋, 甕, 壺) 瓦 土製品(瓦玉(瓦)) 石製品(石鍋, 砥石) 金属器(鉄約, スラグ) 墨書磁器	白磁(碗田·V·V·XX瓶,高台付皿口類,盡)青磁(龍泉碗1·口類,同安碗口類,回 中国產陶器(號,小口瓶,鉢,捏鉢,盤)国產陶器 近世陶磁(陶器鉢)須惠器(甕, 环,坏蓋,高台环)瓦器(均)瓦質土器(水含,鉢)東播系捏鉢土師器(皿,土鍋, 三足香坪)瓦、土製品(瓦玉(白破))石製品(石鍋)金属器(鉄釘)	白磁(碗田·Ⅳ·阳類, 皿) 青磁(龍泉碗1類·咀,同安碗1·山類,高麗碗)中国産陶器(盤,四耳壺,短頸壺,甕,壺) 国産陶器(菱)須恵器(环,坏蓋,高环,靉) 瓦器(纸) 瓦質土器 土師器(皿,坏,土鍋,甕) 瓦	白磁(碗V·VI·VII·VII) X類, 平底皿II·II·VI·VII類, 壶)青磁(龍泉碗I·II類·III, 问安商I·II類, III) 中国產陶器(盤,小口瓶,養,短頸壺,四月壺,捏鉢, III,幹) 近世陶磁(伊万里染付碗,III·Xi,紅III,色絵绪口,陶器甕,関西系白磁碗,注口) 須恵器(坏蓋,養) 瓦器(%) 瓦第七器 土師器(III,養,三足香炉,鍋,七輪) 瓦 石製品(有孔石錘,濱石製品) 金属器(スラグ,煙管雁首)	白磁(碗川~叭·広類,高台付皿川類,平底皿叭類,壺,袋物) 青白磁(合子,ロハケ町、ロハケ型打双魚文皿,袋物) 青磁 龍泉碗 1・11類・皿・ハケ型打双魚文皿,袋物) 青磁 龍泉碗 1・11類・皿・中国産陶器(鍍,盤,皿,鉢,四耳壺,茶釉四耳壺,短頸壺,擂鉢,長瓶,小口瓶) 国産陶器(備前他一虁) 近世陶磁(伊万里染付碗・皿・瓶,関西系白磁碗) 須恵器(饗,坏,坏盏,高台水) 瓦器・黒色土器B類(瑜) 瓦質土器(嚢) 東播系柱鉢土師器(皿,七輪,甕,壺,土鍋,坏) 瓦、土製品(素塊入形) 石製品(石鍋,清石製品) 金属器(鉄釘) 自然遺物(鳥骨)
規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	$1.05 \times 1.02 \times 0.63 + a(1.39 - a)$ $1.65 \times 1.50 \times 1.88 (1.81)$	$0.90 \times 0.53 + a \times 2.17 + a(0.73 - a)$ $1.38 \times 1.20 \times 0.87 + a(0.87 - a)$	1.15×0.65×0.22(3.81)	0.42×0.39×0.10(1.40) 2.60×2.44×0.21(3.62)	$0.72 \times 0.67 \times 0.29 (1.05)$ $1.49 + a \times 1.67 + a \times 0.23 (3.91)$	1.14+ $a \times 0.53 + a \times 0.46(1.09)$ 2.85+ $a \times 1.27 + a \times 2.90(1.22)$	1.99×1.70×2.65(1.04)	$0.73 \times 0.67 \times 1.31(1.47)$ $0.91 \times 0.49 + a \times 2.14(1.42)$
時期(C=世紀)	18C末~驀末	12C末~13C中頃	12C中頃~末	13C	13℃後半~14℃前半	12C中頃~13C初	明洽初	13C後半~14C前半
<b>基</b>	Н	<b>-</b>	-	П .	-	П	П	-
グリット	К-2	J -2	N-3	F-5	G -5	F-6	G-6	9-9
區 構 No.	S E -007	S E-008	S K-009	S E-010	S E-011	S E-012	S K-013	S E-014

上節器・回・坏法 (口径×高) cm	m·VI類·臺·香伊) 青白磁(碗, fi	(業) 近世陶磁 (伊万里染付) 瓦賢士器 土師器(皿, 环,	類,同安碗11類) 中国產陶器(小口斯,四耳、 瓦器(物) 土師器(皿,甕,鼈) 瓦 金属		青磁(龍泉碗 I·山類·壺,同安碗·皿)明青花(皿)中 国產陶器(擂鉢) 須恵器(甕,擂鉢) 瓦器·黑色土器 師器(皿,囊) 瓦 金属器(鉄釘)	青磁(龍泉碗1類,同安碗1類・ +碗・そ(才借口) 須惠器(环,高  皿,變) 瓦(草花文軒丸瓦当)	, 同女碗, 高麗碗) 中国産陶器 須恵器(K, 高台K, K蓋) ,養) 瓦	青磁(龍泉碗1類,同安碗11類,李朝粉 耳壺) 国雀陶器 近世陶磁(伊万里染 不,坏蓋,虁) 瓦器(境) 瓦質土器(鉢)	類) 天目碗 中国産陶器 (四月 土節器 (皿, 坏, 高坏, 蜂, 器台)	中国產陶器(捏鉢,四耳壺,甕,	
4 票 日	日磁(徳田~Vi·以類,高台付皿1・II類,平底皿1・III・N類,壺,香伊) 青日磁(徳. III,合子型) 青磁(龍泉砲1~II類・聖.II) 再型(超. III) 元 (	白磁(商IV~V)類, III. 壺) 青磁(商) 中国產陶器(幾) 施,美濃瀬戸系陶器盤)須恵器(鐵,坏) 瓦器(均) 高台F) 瓦 金属器(鉄釘)	白磁(碗V・X類,皿) 青磁(龍泉碗1類,同安碗1類) 壺) 近世陶磁 須恵器(K, 坏蓋, 囊) 瓦器(地) 土師器(スラグ, 鉄環)	白磁(碗V類) 須恵器(坏) 土師器(皿)	白磁(硫N·V·VI·IX類,皿) 青磁(龍泉磁 I·II類·查 国產陶器(四耳壺,捏鉢,盤) 国產陶器(擂鉢) 須惠 A類(物) 瓦質土器(鉢) 土師器(町,繫) 瓦 金属	白磁(高JN·V·V·V)類,平底皿Ⅲ類) 青白磁(合子) 青磁(龍泉碗1類,同安碗11類。皿) 中国產陶器(甕,盤,壺) 近世陶磁(伊万里染付碗·犬(堵口) 須豊器(K,高台K,丙苯,羧) 瓦器·黑色土器A類(炧) 土師器(Ⅲ,甕) 瓦(草花文軒丸瓦当)土製品(瓦王(瓦質))	白娥(晩11.17類,高占付加11類) 青娥(龍泉午1類,同安碗,高麗碗) (担鉢,甕,皿,盤,四耳壺) 国産陶器(灰釉甕,塩鉢) 須恵器(坏,高台瓦器(焰) 瓦質土器(水会) 土師器(瓜,坏,高台水,萋) 瓦	白碳(碗IV·V·VI類,高白付皿1類,水滴)青磁(龍泉碗粧碗) 中国產陶器 鐵,盤,小口瓶,捏鉢,四耳臺) 国産付碗,陶器碗,甕,小口瓶,捏鉢,四耳臺) 百億行碗,陶器碗,甕,関西系白磁壺) 須惠器(K,坏蓋,甕)土師器(皿,坏,甕,七輪) 瓦,石製品(石綱) 金属器(	白磁(碗,高古付皿川類) 青白磁青磁(龍泉磁1類) 盡,盤) 近世陶磁(伊万里染付碗) 須惠器(漿) 土師 站生(漿) 土製品(絵付人形)	白磁(碗 V 類) 青磁 (龍泉碗 1 類, 同安碗 I・II類) 印鉢) 土師器 (皿, 甕)	(Ⅲ·K 1 製工 )
規模 技工×短辺×深(底面標高) m	4.70×3.25×2.21 (1.68)	$1.42 + a \times 0.72 + a \times 0.43(3.87)$	$1.37 + a \times 0.49 + a \times 0.33(3.94)$	$0.90 + \alpha \times 0.87 + \alpha \times 0.02(4.19)$	$1.96 + a \times 1.48 + a \times 0.39(3.92)$	$3.25 + a \times 2.28 + a \times 0.58(3.96)$	$1.56 + a \times 0.62 + a \times 0.43(3.89)$	2.65+a×1.85+a×0.82(3.50)	1.13×1.11×0.79(3.61)	$1.20 \times 0.53 \times 0.63 (4.03)$	0 0+2×1 54×0 68(3 69)
時期(C=世紀)	18C	12℃中頃~13℃初	12℃中頃~13℃初	12C前半~中頃	13C前半~後半	18C中頃~ 19C前半	12℃中頃~13℃初	18C後半~幕末	12℃中頃~13℃初	12C中頃~13C初	13C前半~中頃
本田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	<del>, .</del>				<del>-</del>	-	П	-		П	П
グリット	ਜ਼-3	B-3	B-3	B-3	B-3	A-5	B-5	B-5	A-6	A-6	B-6
a a a a a a a a a a a a a a a a a a a	S K-015	S K-016	SK-017	S K-018	S K-019	S K-020	S K-021	S K-022	S K-023	S K-024	S K-025

十節器・皿・特法量 (口径×高) cm	中国産陶器 (短頸壺, 四耳壺, 甕) 皿8.1×1.1 :(皿)		中国産陶器 (四耳壶, 鉢) 国産陶器 (壺, A 類(地) 土肺器 (牙蓋, Ⅲ, 环) 瓦	<ul><li>(算) 中国產陶器(盤,養,壺) 須</li><li>(体) 土師器(養,皿,坏) 金属</li></ul>		不, 變) 瓦器(境) 土師器(養,	土師器(養, 皿, 坏) 瓦	青碳 (碗, 皿) 中国產陶器 (甕, 短 万里染付碗) 須恵器 (坏蓋, 甕, 坏) -ト)	[] 須恵器(甕,坏蓋,高台环)	路 国 四十四 1 (45)	青峻 順录略 1 類 'III, ju 女略 1 類 ) III.S.D×1.1 伊万里染付碗) 須恵器 (甕, 坏蓋, 蓋) 金属器 (スラグ)	財・川、向安昭 1 類) 須恵器 (甕, 坏蓋, ラグ) (器 (甕, 坏) 瓦器	財・肌、同文wa 1類 月 須恵器(養、坏養、 ラグ) に器(養、坏) 瓦器 に数(養、水) 瓦器 では類) 中国産胸 質土器 上師器	(4) (1) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4
E	白磁(碗Ⅳ・V 類,皿) 青磁(同安碗 I 類・皿) 中国産修 須恵器(坏,高台环) 瓦質土器(水舎) 土師器(皿)	国産陶器 須恵器(漿) 瓦器(坑)	月碗(碗皿・収類) 青磁(同安碗缸類,皿) 中国產陶器 灰釉虁) 須恵器(坏蓋、甕、坏) 黒色土器 A類(粕) 金属器(鉄釘)	白磁 (碗 V 類, 皿, 壺) 青磁 (龍泉碗 L類, 同安碗 L類) 「 恵器 (甕, 环, 高台环, 环蓋) 瓦器 (统) 瓦質土器 (鉢) 器 (鉄釘)		白磁(碗皿・IV類) 中国産陶器(甕,壺) 須恵器(巧,甕) 皿)	白磁(施1V類) 中国産陶器(四耳壺) 瓦器(地) 土師	日磁(碗11~N.・V類、鉄絵、高台付皿1類、敷) 青磁(碗. 皿) 頸盤、四耳壺、鉢) 国産陶器(漿) 近世陶磁(伊万里染付碗) 瓦器(飧) 土師器(皿,七輪) 瓦 石製品(チャート)	白磁(碗) 青磁(同安碗11類) 中国産陶器(甕,盤) 土師器(壺,甕,皿,坏) 金属器(鉄釘)		白磁 (碗v·vi·nx類,平底皿皿類)青白磁(合子)青磁 龍泉碗 [1 中国產陶器 儘, 魏, 建珠, 绛, 四耳臺) 近世陶磁 (伊万里染付碗) 高白好) 土師器 (甕, 皿) 石製品 (砥石, 滑石製蓋) 金属器 (ス	白碳(碗)V·V·V.X縣,平底皿山類)青白碳(合子)青碳 中国產內器(盤,養,捏鉢,鉢,四耳壺)近世物磁(伊万) 高台子)土師器(養,皿)石製品(砥石,滑石製蓋) 白碳(碗)青磁(碗)中国產陶器(甕,四耳壺)国產 (竾)土師器(皿)	白碳(碗),小八、瓶,平底皿山類)青白磁(合子)青磁 中国產陶器(號,甕,捏鉢,鉢,四耳壺)近世陶磁(伊万) 高台子)土師器(甕,皿)石製品(砾石,滑石製蓋) 白磁(碗)青磁(碗)中国產陶器(甕,四耳壺)国產 (碗)土師器(皿) 台碳(碗)、八、瓜,面)青白磁(面)青磁(龍泉碗1顆、 器(甕,盤,四耳壺,捏鉢)国產陶器 須恵器(鍍)瓦 (甕,皿,籽)瓦、土製品(瓦玉(土師器))	白碳(碗V·V·X類,平底皿川類)青白碳(合子) 青碳 中国產酶器(號,甕,捏鉢,鉢,四耳壺) 近世陶磁(伊万) 高台勾) 土師器(甕,皿) 石製品(砥石,清石製蓋) 白磁(碗) 青磁(碗) 中国產陶器(甕,四耳壺) 国産 (碗) 土師器(皿) 日磁(碗V·X類,皿) 青白磁(皿) 青磁(龍泉碗I類, 器(甕,盤,四耳壺,捏鉢) 国產陶器 須惠器(鍍) 瓦 (甕,皿,环) 瓦,土製品(瓦玉(上師器)) 白磁(碗V·V類,高台付皿I類)青磁(碗)中国產商 陶器(甕) 須惠器 瓦器·黑色土器B類(뚹) 瓦質土: 瓦、土製品(瓦王(上師器))
九		$1.27 + \alpha \times 0.30 + \alpha \times 0.22(4.05)$	1.22 + $\alpha \times 0.75 + \alpha \times 0.14(4.14)$	1.15×0.82×0.51(2.80)	$1.00 + \alpha \times 0.80 + \alpha \times 0.33(3.98)$	$2.33 + \alpha \times 1.22 + \alpha \times 0.34(3.85)$	1.60+ $\alpha \times 1.40 + \alpha \times 0.20(4.00)$ £	2.90 + $\alpha \times 1.10 + \alpha \times 0.32(3.92)$ §	$\begin{array}{c} 0.84 \times 0.82 \times ? \\ 1.40 \times 1.30 \times 2.55 + \alpha (1.54 - \alpha) \end{array}$		$3.00 \times 1.90 + a \times 0.40(3.92)$			$3.00 \times 1.90 + a \times 0.40 (3.92)$ $1.66 \times 1.35 + a \times 0.20 (3.34)$ $1.39 \times 1.20 \times 0.37 (3.81)$ $3.05 + a \times 1.15 + a \times 0.19 (3.97)$
時期(C=世紀)	13C前半~後半	12C~13C	120中頃	17 C		12C後半~末	12C前半~中頃	18C	近世~近代		13C前半~後半	※ 後	後 後 後 半 半 半	後 後 後 末 士 13 C 初 4
検出面	-					-	-	П	-		-			
グリット	C-6	C-5	C-5	다 - 1	D-4	D-4	D-4	E-4	E-4		D-5	D-5 D-5	D -5 D -6	D-5- D-6 D-6
所 本 No.	S K-026	S K-027	S K-028	S K-029	S K-030	S K-031	S K-032	S K-033	S E-034		S K-035	S K-035 S K-036	S K-035 S K-036 S K-037	S K-035 S K-036 S K-037 S K-038

<b>上師器・皿・坏法量</b> (口径×高) cm	上節器 (皿,	1安施1 7, 坏盏,	本土師	(中)	全属器(鉄		中国産陶 瓦質土	<b>幾, 四耳壺,</b> 土師器	器(捏练, 石製品	<b>千壺, 鑑)</b> <b>元智( 坸)</b>	三, ﷺ, 5) 瓦 53(石
出土遺物	白磁(碗田·収類) 中国產陶器(饕) 須惠器(甕,坏蓋,坏) 瓦器(场) 士 环,土鍋,甕)	白磁(碗IV~VI類,平底皿II·VI類,盘) 青白磁(小环)青磁(龍泉碗1類,同安碗1 ·I類)中国產碗器(甕,捏鉢,四耳盘,鉢,坩堝)还坩陷磁(碗)須惠器(水,环盏,甕)瓦器(埼)瓦質土器(Ⅲ)土師器(Ⅲ,环,甕)瓦,土製品(素烷入形)石製品(石鍋)金属器(鉄釘)	白磁(碗収類、平底皿収類) 須恵器(甕,坏蓋,皿,坏) 瓦質土器 東播系捏鉢 土師器(甕,坏) 石製品(石鍋)	白磁(崎田~近類,平底皿〇・町類,壺) 青白磁(ロハケ碗,型打双魚文皿,合子)青磁(龍泉碗1~田類,平底皿〇類,同安碗1・田類)中国底陶器(四日壺,建株、盤、茶種四日壺,皿,羹) 国産陶器(橋戸他) 近世陶磁(草花文袋物,伊万里染付碗)須恵器(坏蓋,甕,皿,坏,叛) 瓦質土器(八舎) 土師器(壺,甕,七輪) 瓦 土製品(管状土錘、人形,皿,瓦壬十師器)) 石製品(清石製蓋,石鍋,チャート,臼玉)金属器(鉄釘,銭)	白磁(碗IV·V類) 青白磁(皿) 青磁(龍泉碗1類,皿) 中国産陶器(四耳臺,茶釉四耳臺,小口瓶,臺) 瓦質土器 東播系捏鉢 土師器(皿,坏) 金属器(鉄釘)		白磁 (碗田・N・N 類・ロハケ) 青磁 (龍泉碗 I・V 類, 同安碗 I 類・Ⅲ) 中器 (魏, 魏, 四耳遊, 小口類) 近世陶磁 (伊万里染付碗, 九州系陶器灯明皿)器 (精幹) 上師器 (代, 皿, 魏, 支脚) 瓦 金属器 (鉄資), 管状銅製品)	白磁(硫IV-VI-VI類) 青磁(龍泉碗I-II類,同安碗I類) 中国產陶器(號,四耳壺 盤,鉢、茶釉四耳壺) 国產陶器 須惠器(蓋,甕,环,高台环) 瓦器(地) 土師器 (环,囊) 瓦	白磁(碗IV類,平低皿II類) 青磁(植泉碗1類,同安碗11類-皿) 中国産陶器(程鉢盤,甕,既,四耳壺) 国産陶器(仮釉甕) 近世陶磁(関西系白磁碗) 上師器 石製品(チャート) 金属器(銭)	白磁(硫IV·VI類) 青磁(龍泉碗 I類·叫,同安皿) 中国産陶器(短頸壺,四耳壺,盤)近世陶磁(伊万里染付碗,紅皿,唐津二彩碗,九州采陶器鉢) 須惠器(囊) 瓦器(场)瓦質土器(水含) 土師器(皿,好,蘘) 金属器(鉄釘)	白條(碗, 平底皿, 壺, 八角小环) 青碳(龍泉碗1類) 中国産陶器(號,捏鉢,皿,斃,鉢) 国産陶器 近世陶碳(九州系陶器甕,関西系陶器鉢) 須惠器(寶,裝, 蓋) 瓦寶士器(於) 土師器(號,土鍋,七輪) 瓦 土製品(瓦玉(陶器-瓦賀)) 石製品(石
規模 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	$1.50 + \alpha \times 0.95 + \alpha \times 0.55(3.60)$	$2.95 + a \times 2.07 + a \times 0.49 (2.05)$	$2.20 + a \times 1.95 \times 0.34 (3.84)$	2.12×1.25×0.57(3.62)	2.37×0.55×0.22(3.98)	$2.37 + \alpha \times 0.79 + \alpha \times 0.25(3.95)$	$2.22 + \alpha \times 0.86 + \alpha \times 0.41(3.82)$	1.33×1.05×0.30(3.95)	2.13×1.90×0.38(3.90)	$2.06 + \alpha \times 0.81 + \alpha \times 0.27(3.93)$	$1.00 + a \times 0.63 + a \times 0.66(3.48)$
時期(C=世紀)	12C前半~中頃	12C後半~13C初	12C前半~中頃	1900初~幕末	近世	近世	18C ~19C	12C中頃~13C初	12C中頃~13C初	17C末~18C末	19C初~幕末
私田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田		Н	П			-	-	-		-	-
グリット	E-6	E-5	E-5	E-5	G-3	G-3	G-4	Н-3	Н-3	H-4	H-5
通 構 No.	S K-040	S K-041	S K-042	S K-043	S K-044	S K-045	S K-046	S K-047	S K-048	S K-049	S K-050

<b>上野器・目・坏法職</b> (口径×高) cm	Ш8.2×1.3												
出土谱物	白磁(崎、壺) 青白磁(台子) 青磁(龍泉碗1・11類,同安碗11類,皿) 天目碗 中国底陶器(茶釉四耳壺,長瓶,甕、盤,四耳壺) 国産陶器(捏鉢) 近世陶磁(伊万里染付碗・水滴・皿,白磁小环,唐津刷毛目碗、徳利,鉢、盤、福岡産陶器碗、甕、擂鉢、関西系白磁碗) 須恵器(坏) 瓦器(地) 瓦質土器(株、水舎、擂鉢) 土師器(甕、土鍋、七輪、水舎) 瓦 土製品(吹子羽口) 石製品(低石) 金属器(鉄釘,スラグ)	白磁(崎田・N・V・V)類,ロハケ皿,合子) 青白磁 青磁(龍泉砲1・II類,同安砲1I 類・III) 中国産物器(鉢,四耳壺,甕,盤) 国産陶器 須恵器(坏蓋,甕,坏) 瓦器 (物) 瓦質土器(甕) 土師器(坏,甕) 金属器(銭約)	白磁(硫V類,皿) 青磁(龍泉碗1・1類,同安碗1類) 中国產陶器(四耳壺,壶) 国産陶器 近世陶磁(伊万里染付碗) 須恵器(甕,坏) 瓦器(坑) 土師器(鍋,环, 甕,高台环)	白磁(碗) 青磁(龍泉碗1類,同安碗1類) 中国產陶器(四耳壺,茶釉四耳壺) 近世陶磁(伊万里染付碗) 須惠器(环,甕,高台环) 土師器(鍋,环,甕)	白磁(碗) 中国產陶器 国產陶器 須惠器(环,高台环) 瓦器(境) 土師器(环,養,高台环) 金属器(鉄釘)	中国産陶器 瓦質土器(變) 土師器(甕)	白磁(碗V類) 瓦器(境) 土師器	白磁(碗田・V)類, ロハケ, 壺, 蓋) 青白磁(碗・ロハケ皿) 青磁(龍泉碗1類, 同安碗1類, 皿, 高麗碗) 中国産陶器 (四耳壺, 茶釉四耳壺) 須恵器 (皿) 瓦器 (地) 瓦器 (地) 瓦賞 (貴女) 東播系程鉢 土師器 (擂鉢,鍋) 瓦 土製品 (瓦玉(白磁))	白磁(碗N·V)類、臺) 青磁(龍泉碗1.1類,同安碗11類) 中国產陶器(鐵,捏鉢,四耳臺) 国產陶器(備前他一擂鉢) 近世陶磁(唐津二彩鑑,現川剧毛目碗,伊万里染付碗) 須恵器(鐵,坏蓋,环) 瓦器(坑) 土師器(土鍋,环,皿,甕) 瓦 土製品(土翁)	白磁(碗0-II·II·IV·II類,平底皿II·IV類) 青白磁(碗)青硅、龍泉碗I·V類,同安碗II類,皿) 明青花(皿)中国産陶器(茶釉四耳壶,蓋,体,甕,四耳壶,短頸壶,綠種盤) 国産陶器(甕)須恵器(甕,坏蓋,坏)瓦器(地)瓦質土器(桂鉢,火舎,鍋)土師器(环,高台环,饗)瓦(三巴文軒丸瓦当) 土製品(瓦玉(瓦質))石製品(石鍋)	国産陶器 須恵器(饗,环,环蓋) 土師器(环,甕,竈)	白磁(硫N·V)類,平低皿V類)青磁(龍泉砲1類,同安砲1・11類,皿,高麗象嵌壺) 中国產陶器(四耳壺,皿,短頸壺,捏鉢,甕,鉢,小壺) 国産陶器(變)須患器(乃,高 白环) 瓦器(地) 瓦質土器(捏鉢,火含) 土師器(鍋) 瓦 金属器(鉄釘)	白磁(碗N・V類、平底皿III・VI類) 青磁(龍泉碗1・II類、同安碗1・II類、III) 明青花(III) 中国産陶器(盤、茶粕四耳盒、扭鉢、四耳壺 鉢) 国産陶器(甕) 須恵器(坊、甕、高白水) 瓦器(協) 瓦賀土器(壺、水舎) 土師器(甕・水鍋) 石製品(おはじき(黒色頁岩),有溝石鏈)
規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	1.45×1.10×0.37(3.80)	$2.22 + a \times 0.88 + a \times 0.41(3.74)$	$2.02 + \alpha \times 1.89 + \alpha \times 0.28(3.86)$	$2.25 \times 1.20 \times 0.33(3.79)$	$1.08 + \alpha \times 0.74 + \alpha \times 0.40(3.80)$	$0.37 \times 0.35 \times 0.15 (4.05)$	$1.20 \times 0.92 + \alpha \times 0.10 (4.08)$	$1.93 + \alpha \times 1.62 + \alpha \times 0.43(3.52)$	17C末~18C中頃 1.65+a×1.58+a×0.27(3.78)	$1.71 + a \times 1.57 + a \times 0.25(3.80)$	0C後半 1.72×1.42×0.15(3.96)	$1.95 + \alpha \times 0.80 + \alpha \times 0.36(3.69)$	13C $\#$ 1 1.65 + $a \times 0$ .75 + $a \times 0$ .28(3.78)
時期(C=世紀)	18C	18C	12C後半~13C初	12C後半~13C初	12C前半~中頃	18C~19C	110中頃~120初	14C~15C	17C末~18C中頃	16C	9C後半~10C後半	12C中頃~13C初	12C中頃~13C初
私田田		-		н	П	Н	П	н	-	н	-	-	П.
グリット	Н-5	Н-5	9-н	9-н	L-Н	F-5	F-5	M-1	M-2	M-1	M-2	N-2	N-2
· No	S K-052	S K-053	S K-054	S K-055	S K-056	S K-057	S K-058	S K-059	S K-060	S K-061	S K-062	S K-063	S K-064

· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	グリット	検出面	時期(C=世紀)	規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	出土造物	<b>土師器・皿・坏法量</b> (口径×高) cm
S K-065	N-2	-	12C中頃~13C初	$1.33 + \alpha \times 0.37 + \alpha \times 0.34(3.72)$	白磁(碗, 皿) 青磁(同安碗1類) 中国產陶器(甕) 国産陶器(甕) 須恵器(牙) 土師器(环,甕) 瓦	
S K-066	F-3	1	18C~19C		白磁(砲, 壺,瓶) 青磁(龍泉碗山瓶,同安皿) 中国産陶器(小口瓶,甕) 国産陶器 (備前他一葉) 近世陶磁(陶器捏鉢,砲) 須恵器(环) 瓦質土器(甕) 土師器 (袰) 瓦,石製品(砥石) 金属器(スラグ,銭)	
S K-067	F-3	1	18C ~19C		白磁(砲II・II・IV・V・X類, 高台付皿II類、壺) 青磁(龍泉砲I 類) 天目砲 中国産陶器(盤, 甕, 四耳壺) 国産陶器(饗) 近世陶磁(伊万里染付水注, 碗, 関西系自磁砲) 須恵器(甕, 环, 高台环, 环蓋) 瓦器(均) 瓦質土器(甕) 土師器(甕, 高台环, 産, 七輪) 右製品(石鍋) 金属器(銅製取手, 致釘)	
S K-068	F-4	1	18C~19C		青磁(龍泉碗11類, 同安碗11類) 中国産陶器(變) 近世陶磁(伊万里染付瓶) 瓦質土器(變) 瓦	
S K-069	G-1		近世	$1.40 \times 0.53 + a \times 0.22(3.87)$	白磁(砲机類) 青磁(龍泉砲1類) 中国産陶器(短頸壺) 国産陶器 須恵器(甕, 环, 好蓋) 瓦器(地) 瓦質土器 土師器(环,高台环,高环蓋) 瓦 金属器(スラグ) 墨書土師器	
S K-070	G-2	1	近世	1.75+ $a \times 1.47$ + $a \times 0.46(3.59)$	白磁(砲IV ~ VI·X類, 高占付皿 II類·平底皿 VI類) 青白磁(Ⅲ, 合子, 壶)青磁 (龍泉砲 I·II類, 香炉, Ⅲ, 同安砲 I·II類, Ⅲ) 天目砲 中国産陶器 (茶柚四耳壶, 捏鉢, 點, Ⅲ, 四耳壺, 甕, 短頸壺) 国産陶器(甕) 須惠器(甕, K蓋, K) 瓦器(均) 瓦質土器(鉢)土師器(K, 高台K, 甕, 土錦, 七輪)瓦。金属器(錢)	
S K-071	G-2	Н,	近世	$1.36 + a \times 0.83 \times 0.13(3.96)$	白磁(砲II・VI類) 青磁(龍泉砲II・II・II類,同安砲・III) 中国産陶器(四耳壺, 甕, 茶釉四耳壺, 砲) 須恵器(K, 甕, 高台环) 瓦器(炻) 瓦質土器(鍍, 火舎) 土 師器(K, 甕, 七輪, 壺) 瓦 金属器(鉄釘, スラグ)	
S K-072	G-2	1	近世	$2.06 \times 1.50 + a \times 0.24 (4.01)$	白磁(碗N·V·N·X類, 平底皿1類, 壺) 青磁(龍泉碗1·V類, 皿, 同安碗1·1類, 皿) 中国産陶器(盤, 四耳牽, 甕, 皿) 国産陶器(鍍) 須恵器(环) 瓦質土器 土 師器(环, 虁) 金属器(鉄釘)	
S K-073	н-2	1	近世	1.57×1.17×0.39(3.84)	白磁(碗II·N·V類) 中国産駒器(茶釉四耳壺,四耳壺) 須惠器(甕,坏蓋, 环,高白环) 瓦器·黑色土器A·B類(埯) 瓦質土器 土師器(甕,壺) 石製品(石球)自然遺物(炭火米)	
S K-074	Н-2		1900~幕末	29.2×1.83×0.86(3.37)	白磁(阀川·Ⅲ·Ψ·X類, Ⅲ, 壶)青白磁(小壶, Ⅲ)青磁(龍泉砌]~Ⅲ·V類, Ⅲ,同安碗Ⅰ·Ⅱ环, Ⅲ、苹蛸Ⅲ)中国産陶器(甕,四耳壶,盤,鉢,短頸壶,小口瓶)国産陶器(甕,如耳壶,盤,鉢,短頸壶,小口瓶)国産陶器(甕,妹, Ⅲ,捏鉢,綠釉盤,壺)近世陶磁(伊万里染付碗, Ⅲ,瓶,陶器碗·擂鉢,関西系白磁碗,美邊,瀬戸系菊Ⅲ)須惠器(甕, 环蓋, 好,高台好)瓦器(均)瓦質土器(甕,火舎)土師器(甕, 甕,蓋,壺)瓦、土製品(瓦玉(白磁))金属器(鉄釘)	
S K-075	н-2	1	12C中頃~13C初	$10.4 + a \times 0.40 + a \times 0.33(3.90)$	白磁(皿) 青磁(同安碗11類) 中国産陶器(蓋,盤,四耳壺) 国産陶器(甕) 須恵器(环) 瓦器(城) 瓦質土器(水舎) 土師器(环,甕,鍋)	

土師器・皿・坏法量 (口径×高) cm	<b>手盘)</b> <b>ච</b>	અહે	(編 (編) 大	紫) (大)	(作	来,	[章]			不蓋)	来 玩 . Pa . )	松	<b>国産陶</b> 石製
出土遺物	白磁(硫加・N・V・V・X 類、皿) 青磁(同安碗1類) 中国産陶器(鎌,捏鉢,鑑,四耳壺) 国産陶器(漿) 須恵器(坏蓋,坏,高台环) 瓦器(均) 瓦質土器 土師器(环,漿) 瓦 石製品(石鍋,石珠,チャート) 自然遺物(馬歯)	白磁(硫Ν·Ν類, Ⅲ, 壶) 青磁(同交磁) 中国産陶器(钽幹, 茶釉四耳壶,四耳壶, 囊, 坏蓋,高台环) 瓦器(地) 瓦質土器 土師器(环, 丸底环, 高环, 甑, 甕) 瓦 石製品(石鍋) 自然遺物(馬廣)	白磁(徳川・N・N・N・KK 高台付皿川類・平底皿川・N類・ロッグ・灯明、合子) 青白磁(型打双角文ロック町) 青磁(龍泉碗1・川類,同安碗1・川類,皿) 中国産陶器(捏鉢,盤,四耳壺,短頸壺,皿,長瓶,甕,茶釉四耳壺,綠釉盤,印花盤) 国産陶器(菱)須惠器(甕,坏蓋,坏,高台环) 瓦器(境) 瓦質土器(鉢、水合) 土師器(环装、七輪、高环、土穀)) 瓦 土製品(管状土錐) 石製品(石鍋) 金属器(鉄釘)	白磁(碗川·V)類)青磁(同安碗 I·U類) 中国產陶器(茶釉四耳壺,四耳壶,甕,鐾) 国産陶器(甕) 近世陶磁(伊万里染付碗,瓶,関西系碗) 須恵器(甕,壺,坏蓋,环蓋,环) 瓦器(埯) 瓦質土器 土師器(环,甕) 瓦 金属器(铁片,錢(熙率元宝))	白磁(碗N·VI類) 青磁(皿) 中国産陶器(鉢,小口瓶,茶釉四耳壺) 国産陶器(行平) 須恵器(鍍,坏,坏蓋) 瓦器(埯) 土師器(坏,壺,甕)	白磁(碗IV·VI類, 高台付ⅢI類) 青白磁(合子) 中国産陶器(壺) 須惠器(甕,蓋 坏,高台坏,壺) 瓦器(地) 瓦質土器 土師器(坏,坏蓋,甕,高台坏)	白磁(碗) 青磁(龍泉碗1・11類,同安碗11類) 中国産陶器(盤,小口瓶,甕,四耳壺) 国産陶器(甕) 須恵器(环蓋) 瓦器(埦) 瓦質土器(甕) 土師器(环,焼塩壺)	白磁(碗) 須惠器(坏蓋,坏) 土師器(坏,甕)	白磁(碗収類) 中国産陶器(四耳壺) 須恵器(坏蓋) 土師器	白磁(碗)青磁(龍泉碗1類)中国産陶器(四耳壺)須恵器(甕, 环, 高台环, 牙蓋) 瓦器(垢)土師器(鍋, 环, 饕)	白磁(崎川・州・戊類,高台付川、川類・平底川、附類)青白磁(合子, 碗)青磁(龍泉碗1.1類, 肌,香丹,同安碗1・川類, 肌)中国產陶器(盤,四耳壺,茶釉四耳壺,小口瓶,畫,坦鉢,短頸壺)国產陶器(囊)近世陶磁(伊万里染付碗,壺,紅肌,関西系碗,陶器變)須惠器(水,養,水蓋)瓦器(均)上前器(變)近,土製品(瓦玉(日磁))石製品(石鋼,有溝石雞)金属器(鉄釘)显書(素塊人形(唐人)「古長」)	中国產陶器(四耳壺) 近世陶磁(九州系陶器瓶,美灣·瀬戸陶器系鉢) 瓦質土器 (水鉢) 土師器(七輪) 土製品(素焼入形(唐人)) 墨書土師器	白磁(碗N·V·X氣高台付皿 I類)青白磁(碗)青磁(雨安碗 1類)中国產陶器(四耳壺)須惠器(鐵. 序蓋. 序)瓦器(筑)土師器(好. Ⅲ. 饕)瓦·塼 石製
規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	$20.3 \times 0.8 + \alpha \times 0.34(3.89)$	$4.54 + \alpha \times 2.62 + \alpha \times 0.37(3.82)$	$2.45 + a \times 0.56 + a \times ?$	$3.40 + a \times 1.48 + a \times 0.34(4.03)$	$1.44 + \alpha \times 1.17 + \alpha \times 0.24(3.87)$	$2.78 + \alpha \times 1.12 + \alpha \times 0.27(3.81)$	$1.21 \times 0.78 \times 0.14(4.06)$	$1.43 + a \times 0.87 + a \times 0.10(3.96)$	$0.93 + \alpha \times 0.46 + \alpha \times 0.56(3.50)$	$1.20 + \alpha \times 10.53 + \alpha \times 0.15(3.97)$	$1.17 \times 1.16 \times 1.53 + a(2.29-a)$ $1.78 \times 1.52 \times 0.53 + a(3.73-a)$	$0.83 \times 0.76 \times 1.35 + a (2.96 - a)$ $1.37 \times 1.23 \times 0.53 (3.06)$	$0.97 \times 0.75 \times 0.43(3.50)$
時期(C=世紀)	12C後半~末	12℃中頃~13℃初	19C	1900~幕末	12C中頃~13C初	12C中頃~13C初	18C~19C	11C中頃~12C初	11C中頃~12C初	11C中頃~12C初	18C~近代	18C~19C	12C後半~末
和田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	-	П	Н	-	-	-	-	П	-	-	-	П	23
7117	Н-2	Z- I	1-1	H-1-	N-3	N-3	G-2	N-3	N-3	K-3	Н-3	K-3	C-4
通 奪 No.	S K-076	S K-077	S E-078	S D-079	S K-080	S K-081	S K-082	S K-083	S K-084	S K-085	S E-086	S K-087	S K-088

松田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	1	時期(C=世紀)	規模 長辺×短辺×深(底面標高) m	第十 出 物 第二 日 中	<b>土師器・皿・坏法量</b> (口径×高) cm
12		12C中頃~13C初	$2.22 \times 20.5 \times 0.37 (3.54)$	白磁(碗) 青磁(龍泉碗1類) 中国産陶器(茶釉四耳壺,蓋,甕) 須恵器(甕,皿) 瓦器(场) 土師器(壺,甕) 瓦	
12.		12 C後半~末	$0.62 \times 0.57 \times 1.40 (1.32)$ $2.39 \times 1.95 + \alpha \times 0.45 (2.50)$	白磁(碗0·II·N·V·V·V·K類, 鉄絵, 平底皿II·N·V·N類, 臺, 香炉) 青白磁(合子. II) 青磁槽系硫, 類, 同安碗·II類) 天目碗 中国產陶器 (四耳臺, 甕, 茶釉四耳臺, 捏鉢, 鉢, 長梗) 国產陶器(囊) 近世陶磁(伊万里染付碗) 須惠器(甕, 环蓋, 环, 高台环) 瓦器,黑色土器A·B類(%) 瓦質土器 東播系捏鉢 土師器(K·九底环、土鍋、高环、臺, 횇) 瓦 土製品(管状土錘, 瓦王(日磁・青磁)) 石製品(石鍋, 磨石) 墨書磁器	平15.1×3.0 Ⅲ9.3×1.3
12		12℃後半~末	$2.24 + \alpha \times 1.45 + \alpha \times 1.79 (2.29)$	中国産陶器(捏鉢,四耳壺) 東播系捏鉢 土師器(皿,坏,高台环,丸底坏,甕,高环) 瓦・塼 石製品(砥石) 金属器(スラグ)	
1 2	1 5	13C前半~後半	$2.40 + a \times 1.20 + a \times 1.33(2.02)$	白磁(碗Ⅲ·Ⅳ~叭·兀類,平医Ⅲ·Ⅴ類) 青磁(龍泉碗1·Ⅲ類) 中国產购器(晚Ⅲ·Ⅳ~叭·兀類, 华度Ⅲ·Ⅴ類) 青磁(龍泉碗1·Ⅲ類) 由重购器(觀) 近世陶磁(伊万里染付碗,唐津即毛目碗,伊万里染付紙,陶器擋鉢) 須惠器(甕,环蓋,环,Ⅲ) 瓦器-黑色七器 A類(16,終) 土師器(甕,小臺,土鍋,鴽,埔,Ⅲ,环) 瓦。墨書磁器	
1 7	1 0	12C後半~末	1.20×0.97×0.64(3.37)	白磁 (碗田・N・V・V・V・X 株) 高台付皿 II 類、端反り皿、平底皿皿・NI類、塗) 青白磁 (合子) 青磁 (同支碗 I・II 類、季単粉粧碗) 中国産陶器(四月壺、盤、捏鉢、茶桶四耳壺、小 I 紙) 国産陶器(虚) 須恵器(甕、竜、环蓋、环、高 54、高 54、 高 54、 高 54、 直 54) 互器(16) 互置(16) 互質 16) 五 万製 日 (版 24) 名 16) 名 17) 1 万製 1 (版 2) 2)	环 16×3.1
_	l ã	12C後半~13C初	1.40×1.02×1.40(2.51)	白磁(硫N・V・V・V・K 類、平底皿V類、皿) 青白磁(合子, ロハケ皿) 青磁(同安施 II類) 中国産陶器(鑑, 小口瓶、壺, 靉) 国産陶器(靉) 須恵器(环, 甕, 高台环) 瓦器(地) 土帥器(皿, 墾, 高台环, 坏) 瓦、土製品(瓦玉(自磁)) 石製品(石鍋)	
	~ ~	13C末~14C初	1.37×1.21×1.50(2.43)	白磁(碗川・N・V・K類、皿,高合付皿川類、平炭皿川類、壺) 青磁(龍泉碗1・川類, 环   同安碗1・川類・町) 中国産陶器(鑑,四月壺,魏,短頭壺,鉢,埕鉢,茶釉四月壺)   11.4-   国産陶器(備前他一菱) 須恵器(环蓋,甕,环,高台环) 瓦器(场) 瓦賀土器(鉢) 東播系程鉢 土師器(皿,小鉢 卸皿) 瓦,土製品(瓦玉(陶器)、吹子羽口) 石製品(砥石,有孔石錐,浮子) 金属器(鉄釣,スラグ) 自然遺物(貝殻)	坏 11.4~12.4×2.5~2.7
	~	110中頃~120初	$1.14 \times 0.27 + \alpha \times 0.23(3.66)$	白磁(皿) 須惠器(變) 土師器(皿,坏) 瓦	
==	١ĕ	13C末∼14C初	$2.25 + \alpha \times 0.88 + \alpha \times 0.35(3.55)$	白磁 (ロハケ碗) 中国産陶器 (茶粕四耳壺) 国産陶器 (繋) 須恵器 (环, 坏蓋, 甕, 高台坏) 瓦器 (地) 瓦質土器 (鉢) 土師器 (皿, 坏, 甕, 鍋) 瓦 石製品	
_	22	12C中頃~13C初	$1.12 + \alpha \times 0.55 + \alpha \times 0.35(3.49)$	白磁(碗11·V·O)類,鉄絵) 青磁(龍泉碗1類,同安碗11類) 中国産陶器(盤,甕) -須恵器(坏蓋,坏,甕,高坏) 瓦器(垢) 瓦質土器(靉) 土師器(坏,甕,皿)	
_	%	120中頃~130初	1.39×0.95×0.83(2.83)	白磁(硫N·V·V·N類, 平底皿 D類) 青磁(同交碗 D類, 皿, 龍泉碗 L類) 中国產陶器(號, 茶釉四耳壶, 捏鉢, 四耳壺) 国產陶器(號, 綠釉) 近世陶磁(伊万里染付碗,陶器饕) 須恵器(皿, 环, 斃, 壺, 环蓋) 瓦器(炮) 土師器(土鍋,甕,旣, 皿, 环,鎜) 瓦。境,	
	13(	13C前半~後半	$1.50 \times 1.49 \times 0.41(3.49)$	白磁(碗()類) 中国產陶器(數) 国產陶器 須惠器(號,环,壺) 瓦器(兔) 土師器(川,环,號,鶴,鋒) 瓦 墨書土師器	

<b>土師器・皿・坏法量</b> (口径×高) cm					皿8.7×1.2			Ⅲ 9.0×1.2		Ⅲ9.3~9.4×0.9~1.3					
出土谱物	白磁(碗) 青磁(皿) 須惠器(坏,甕,坏蓋,高台坏) 土師器(壺,坏,甕,皿) 瓦	白磁(碗皿~V類,臺) 青磁(龍泉碗I類,同安碗I類) 中国產陶器(盤,四耳壺, 鉢,茶釉四耳壺) 国產陶器(備前·瀬戸他—壶,虁) 近世陶磁(伊万里染付碗·白磁 壺蓋·紅皿,関西系白磁碗) 須恵器(环,甕,坏蓋,高台环) 瓦器(坑) 土師器(皿, 环,高环,甑,甕,鍋) 瓦,石製品(石鍋)	白磁(碗) 青磁(同安碗11類,皿) 国產陶器(備前他一擂鉢) 須惠器(环) 土師器(Ⅲ)	白磁(碗) 青磁(同安碗 I 類) 中国産陶器 (茶釉四耳壺) 須惠器 (坏蓋) 瓦器 (垢) 土師器 (皿, 坏, 甕)	白磁(碗皿·V·V·V)類,高台付皿1·D類,平底皿皿類,壺) 青磁(碗)中国產陶器 (捏鉢,盤,茶粕四耳壶,甕,短頸壶,壶,小口漿) 国産陶器(甕,綠种皿)須恵器(环,蓋,甕,尽,高台K) 瓦器(均) 瓦質土器(水含)土師器(甕,皿,环,高台K,甑)瓦,石製品(砥石,石鍋)金属器(錢釘)自然遺物(歐濱)	白磁(碗 0 類) 須惠器(坏蓋,坏,甕,高台环) 土師器(土鍋,皿,坏,甕)	白磁(碗) 青磁(同安碗 I 類) 土師器(皿,坏)	白磁(碗LX類) 青磁(同安碗 I・II類) 中国産陶器(四耳壺, 行平) 須恵器(环,甕, 坏蓋,高台环) 瓦質土器(鉢) 土師器(鍋,皿) 墨書陶磁器 自然遺物(貝裁)	白磁(碗, Ⅲ, 平底皿田類,臺) 中国產陶器(四耳臺,甕,盤,株,茶桶四耳臺) 近世陶磁(伊万里染付皿,碗,そば猪口,青璇皿,陶器檔鉢,片口) 須恵器(环蓋,甕,壺,环,高台籽) 瓦器(坑) 瓦實土器(体,火舎) 土師器(皿,环,甕,七輪) 弥生(臺)瓦,金属器(鉄釘,釣針) 墨書土師器	白磁(碗収氪, 袋物, 台子, 皿) 青磁(龍泉碗1・11類,同安碗1・11類・皿) 中国產 陶器(甕, 茶釉四耳壺, 鉢, 盤) 固產陶器 須惠器(环, 甕, 高台环) 瓦器(坳) 土 師器(皿, 环, 甕) 瓦, 石製品(石鍋) 金原器(鉄釘)	須恵器(环蓋,甕) 瓦器(塊) 土師器	須惠器(坏蓋) 土師器(皿)	土師器(坏)	土師器(變)	白磁(碗川・N・V・N・X 類・ロハケ, 壺, 皿, 高台付皿 II類, 平底皿 VI類, 春伊) 青磁 (龍泉碗 I・II・II類, 皿, 小鉢, 同安碗 II類) 中国産陶器 (盤, 四耳壺, 茶粕四耳壺, 鉢, 甕, 捏鉢, 皿) 国産陶器 (壺, 甕, 綠釉盤) 近世陶磁(陶器擂鉢, 壺) 須恵器 (甕, 坏, 好蹇, 高台好) 瓦器 (琉) 土師器 (皿, 坏, 甕) 瓦 土製品 (瓦玉(土師器, 日磁)) 金属器 (鉄釘, 鉄製品)
規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	$1.72 \times 0.80 \times 0.22(3.73)$	$1.92 + a \times 1.40 \times 1.69 (1.99)$	$1.20 \times 0.74 \times 0.59 (1.62)$	$1.24 \times 0.95 + a \times 0.24 (3.60)$	$2.24 \times 2.03 \times 0.95 (2.93)$	$1.32 \times 0.89 + \alpha \times 0.40(3.46)$	$1.11 \times 0.49 \times 0.22(1.80)$	$0.98 + \alpha \times 0.50 + \alpha \times 0.78(3.17)$	0.93×0.80×2.75(1.18) 1.30×1.23×2.57(1.30)	1.41×0.87×0.71(2.91)	$1.70 \times 1.24 \times 0.40 (2.63)$	$0.87 + \alpha \times 0.31 + \alpha \times 0.22(2.69)$	$1.50 + \alpha \times 1.17 + \alpha \times 0.34(2.86)$	$1.26 + \alpha \times 0.4 + \alpha \times 0.05(3.06)$	$0.85 \times 0.85 \times 0.49 (1.15)$ $3.15 + \alpha \times 1.88 + \alpha \times 0.76 (1.64)$
時期(C=世紀)	12C中頃~13C初	12C中頃~13C初	16C	12C中頃~13C初	12C中頃~13C初	11C中頃~12C初	16C	12C中頃	18C~近代	12C中頃~末	11C中頃~12C前半	12C中頃~13C初	8C~12C₩	8C~12C初	13C後半~14C初
本田田	2	2	23	23	2	23	23	8	-	82	1	П		-	П .
グリット	B-3	B-6	E-2	D-6	E - 2	F-5	F-2	N 1-1	F-4	9- I	N-5	N-5	N-4	N-4	9-N
遣 構 No.	S K-101	S K-102	S R-103	S K-104	S K-105	S K-106	S R-107	S K-108	S E-109	S K-110	S K-111	S K-112	S K-113	S K-114	S E -115

<b>土師器・皿・坏法量</b> (口径×高) cm						COLOR MINISTER			4			<b>Ⅲ</b> 8.6∼9.8×1.0∼1.3		
出土谱物	白磁(碗 V 類) 青磁(龍泉碗 L 類) 中国産陶器(長瓶) 須恵器(45、甕, 47蓋, 高台47) 瓦器(地) 土師器(皿, 45、塊塩壺, 甕)	中国産陶器(甕,茶入)須恵器(北,甕,坏蓋,高台*环) 土師器(皿,坏,甕) 金属器 (鉄釘)	白磁(碗IV·VI類,平底皿II類) 国產陶器(甕) 須恵器(47蓋, 47, 高台47, 高47) 瓦器(地) 瓦質土器 土師器(甕, III, 47) 瓦	白磁(碗) 青磁(碗) 中国產陶器(茶桶四耳壺)須惠器 土師器(皿)	白磁(皿) 青磁(同安碗) 中国産物器(茶釉四耳壺,甕) 須恵器(甕) 瓦器(境) 土師器(4人,皿,甕) 金属器(スラグ)	白磁(碗,平底皿) 中国產陶器(茶釉四耳臺,四耳臺) 瓦器(境) 土師器(皿, វ<)	白磁(端反り碗)	白磁(端反)碗) 青磁(龍泉碗) 中国產陶器(四耳壺,茶釉四耳壺) 国産陶器 須恵器(鍍) 瓦器(埯) 瓦質土器(擋鉢) 土師器(壺,皿) 土製品(吹子羽口) 石製品(垮石)	白磁(碗田·IV·VI類, 平底皿田類) 青磁(同交碗1·I類·皿) 中国產陶器(甕,盤,小口瓶,壺,皿,四耳壺) 須恵器(甕,坏) 東橋永程鉢 土師器(甕,皿,圷) 瓦土製品(瓦玉(白磁)) 石製品(石鍋) 金属器(鉄釘) 自然遺物(魚骨)	白磁(碗 V·V)類) 青磁(同安碗 II類) 中国産陶器(長抵,四耳壺) 国産陶器(甕)近世陶磁(伊万里染付碗) 須恵器(鐵) 瓦質土器 土師器(4, 號,皿) 自然遺物(卷貝)	白磁(碗IV·VI類, III) 青磁(同安碗 I類·III) 天目碗 中国產陶器 (鑑, 捏鉢, 四耳壶, 鉢) 須恵器 (甕, メイ, 高台-メイ, メイ蓋) 黑色土器 A類(培) 上師器 (III, 低, 甕) 瓦石製品 (石鍋) 金属器 (鉄釘) 自然遺物 (馬歯)	白磁(碗O・IV・V・IX類, 高台付皿II類, 臺)青白磁(小壺, 皿) 青磁(同安% I・II 類, 龍泉碗 I類・皿)中国座陶器(盤, 甕, 鉢, 四耳壺, 短頸壺, 小口瓶, 捏鉢, 茶桶四 耳壺) 国産陶器(常滑・備前他一變) 須恵器(甕, 环, 高台45, 环蓋, 臺) 瓦器(筑) 瓦質土器(擂鉢) 東播系捏鉢 土師器(壺, 皿, 环, 靉) 瓦・尃 石製品(石鍋, 黒鑵石剝片) 金属器(鉄釘)	白磁(碗皿·Ⅳ·Ⅵ·双類,高合付皿Ⅱ類,平底皿Ⅲ類,壶) 青磁(同安碗Ⅱ類,龍泉碗]類,Ⅲ) 天目碗 中国產胸器(盤,四耳壺,甕,皿,捏鉢,長瓶) 固産陶器(鍍) 須惠器(代,甕,高台代,高杯) 瓦器(%) 土師器(甕,七輪,皿) 瓦、墨書碗器	白磁(碗VI類)青白磁(皿) 青磁(同安碗II類) 中国産陶器(四耳壺) 国産陶器(瀬戸他一甕・灰釉) 須恵器(甕, 74, 高台圷) 土師器(14, 皿,甕) 瓦(北方系軒平瓦当)
規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	$1,77 + a \times 0.78 + a \times 0.48(3.43)$	$1.32 \times 0.76 + \alpha \times 0.18(3.70)$	$1.32 + \alpha \times 0.74 + \alpha \times 0.13(3.71)$	$0.85 \times 0.71 \times 0.46 (2.22)$	1.51×1.00×1.15(1.61)	$1.31 \times 0.76 \times 0.42(2.10)$	$1.07 \times 0.68 \times 0.45 (1.82)$	$1.67 \times 0.51 \times 0.46 (2.22)$	1.24×1.06×1.22(2.55)	$1.04 + a \times 0.69 + a \times 0.35(3.82)$	$1.04 + a \times 1.00 \times 0.72(3.06)$	$1.70 + \alpha \times 1.49 \times 0.97(2.85)$	1.83×1.17×1.03(2.90)	$1.23 \times 0.93 + a \times 0.35(2.51)$
時期(C=世紀)	12C中頃	110~120初	11C中頃~12C初	16C	16C	16 C	16 C	14C~15C	12C末~13C初	12C中頃~13C初	12℃中頃~13℃初	12C後半~13C初	12 C 中頃~13 C 初	12C中頃~13C初
私国	2	2	2		2	2	2	2	2	н	72	7	23	7
4117	H-1	н-2	I -2	I -4	G-3	H-4	F-2	F-2	L-1	E-1	N-2	N -2	N-3	G-1
w w w	S K-116	S K-117	S K-118	S R-119	S R -120	S R-121	S K-122	S K-123	S K-124	S K-125	S K-126	SK-127	S K-128	S K-129

グリット	林田田田	時期(C=世紀)	規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	田 土 遺 物	土師器・皿・坏法量 (口径×高)cm
G-3	3	12C中頃~13C初	0.80×0.77×0.43(1.13) 1.73×1.18×0.51(1.55)	日磁(碗 A・N類 平 佐皿 O・N類, 壺, 合子) 青磁(同安碗 I類・皿 II類, 龍泉碗 III 1類, III) 中国産陶器(鑑, 甕, III, 捏鉢, 四耳竜, 私 短頸壺) 国産陶器(饗) 須惠 器(變, K, 高台-K, 坏蓋) 瓦器(物) 土師器(皿) 瓦 石製品(石鍋, 石畳) 金属器(鉄釘, スラグ) 自然遺物(影骨)	Ⅲ8.8×1.1
G-3	က	12C中頃~13C初	0.74×0.72×0.50(1.55) 1.07×0.93×0.67(1.78)	白磁(硫和・戊類・金) 青白磁(合子) 中国産陶器(線,四耳拳,数) 国産陶器(線) 須恵器(線,坏蓋,高台が) 瓦質土器 土師器(45,高台北,號,土織) 土製品(瓦玉 (瓦)) 金属器(スラグ,鉄剣)	
Н-3	က	12C中頃~13C初	$0.68 \times 0.49 + a \times 0.57 (1.30)$ $1.50 + a \times 0.82 + a \times 0.64 (1.85)$	白磁(砲) 青磁(同安碗1類) 土師器(壺,皿,坏,甕) 瓦 金属器(スラグ)	
Н-3	က	12C中頃~13C初	1.60 × 1.22 + $\alpha$ × 0.37 (1.86)	白磁(碗W・VJ類,平底皿川類,壺) 青白磁(合子,碗) 青磁(同安碗11類,龍泉碗1 類) 中国産陶器(茶細四月卷,鉢,四耳卷,盤,葉擂鉢) 須恵器(Ⅲ,环,高台环) 瓦器(碗) 土師器(坏蓋,Ⅲ,环,夔) 瓦 石製品(石鍋,滑石製品) 金属器(スラ ブ,鉄釘,刀子) 自然遺物(附骨)	
A-6	3	12C中頃~13C初	$2.32 \times 1.90 + a \times ?$	白磁(碗IV~VI·IX類, 高台付ⅢV類) 青磁(同安碗Ⅱ類) 中国産陶器(捏钵, 四耳壺 盤,裝, 茶釉四耳壺) 国産陶器(鍍, 纖戸他一壺) 近世陶磁(伊万里Ⅲ) 須恵器 (オ、Ⅲ,麴, 高台北, វ샤蓋) 瓦器(物) 土師器(壺, オヘ,麴) 瓦 石製品(砥石,石鍋)	
B-6	60	12C中頃~13C初	2.05×1.43×0.89(1.71)	日磁(崎田・V・X類) 青磁(同安飾1・1類) 天目崎 中国産陶器(四耳竜,甕,盤) 国産陶器(装) 須恵器(纜, វ<2巻, វ<3) 瓦器(始) 土師器(纜, វ<5,高台4く)金属器(スラグ)	
B-5	့က	12C中頃~13C初	$1.23 \times 1.02 + \alpha \times 0.48(2.11)$		
A-6	3	11C中頃~12C初	$0.50 \times 0.35 \times 0.53 (2.58)$	白磁(碗Ⅲ類) 須惠器(皿, 坏) 瓦器·黑色土器B類(塊) 土師器(皿, 坏, 甕, 丸底坏)	
E-2	2	15C前後	$1.09 \times 0.57 \times 0.17 (1.47)$	白磁(碗) 青磁(印花碗) 中国產陶器(茶釉四耳壺) 瓦質土器(釜) 瓦 石製品 (浮子,叩石)	
9-2	2	12C前半~中頃	$1.96 \times 1.90 \times 0.63(3.20)$	白磁(碗 A・IX類) 近世陶磁(伊万里染付碗) 須恵器(甕, 74蓋, 高台47) 瓦土師器(皿, 47, 甕) 金属器(スラグ)	
J-2	က	古墳前期	$1.50 + \alpha \times 1.60 \times 0.43(2.91)$	白磁(皿) 土師器(甕,坏) 石製品(浮子)	
I -4	က	16C	$1.24 \times 0.50 + \alpha \times 0.32(2.34)$		
E-4	3	古墳前期	$0.38 \times 0.33 \times 0.30 (1.47)$ $4.58 \times 3.12 + \alpha \times 1.21 (2.09)$	土師器(甕, 高坏, 器台, 鉢)	
B-3	3	9C前半	$1.25 + \alpha \times 0.87 \times 0.27(3.05)$	須恵器(坏) 土師器(壺,甕,皿)	
B-4	3	古墳前期	$1.25 \times 0.55 \times 0.34 (3.00)$	土師器(高坏、養, 皿)	
M-3	က	8C後半	$1.66 \times 1.30 + \alpha \times 0.47 (3.08)$	須恵器(養, 坏, 皿) 土師器(壺, 坏, 甕)	

1		-	1 1 1 1	類		東水学・目・路場十
画 和 No.	7 1 % 1		再題(こ=世紀)	長辺×短辺×深(底面標高) m		(口径×高)cm
S K-146	L-3	3	8C後半	$1.34 \times 1.34 \times 0.70(2.88)$	須惠器(北、坏蓋、鎏) 土師器(壺、甕、圷) 石製品(磨石)	
S D-147	K-3	3	6C後半	$3.04 + \alpha \times 0.57 + \alpha \times 0.29(3.30)$	須惠器(蓋, 坏, 高坏)	
S K-148	J-1	3	古墳前期	$2.90 \times 1.42 \times 0.82(2.32)$	白磁(碗) 須恵器(蓋,蓋,壺,高式,环) 自然遺物(馬歯)	
S K-149	Z- I	3	26	$1.52 \times 1.07 \times 0.48 (2.82)$	中国産陶器(盤) 須恵器(甕,坏) 土師器(皿,坏,虁) 石製品(浮子)	
S K-150	H-1	3	50初	$1.12 \times 0.86 + \alpha \times 0.52(2.84)$	上師器(號) 円筒埴輪	
S E-151	Н-3	က	12C中頃~13C初	$2.12 \times 1.56 \times 1.51 + \alpha (1.84 - \alpha)$	白磁(碗N類) 青磁(同安碗1類) 中国産陶器(四耳壺,甕,盤) 国産陶器(甕, 捏鉢) 土師器(甕,皿) 瓦,	
S K-152	I -3	က	12C中頃~13C初	$1.78 \times 0.97 + a \times 0.79(2.40)$	白磁(碗)青磁(同安碗11類)中国產陶器(甕,四耳壺,盤)須恵器(环)瓦器 (稅)土師器(皿,水,甕)瓦	
S C-153	B-3	3	7C後半	$4.50 \times 3.56 \times 0.55 (2.83)$	須惠器(魏, 坏蓋, 环, 高台坏) 土師器(魏, 高坏, 皿, 鉢) 金属器(鉄釘)	
S C-154	B-4~5	3	古墳前期	$5.60 \times 3.22 + \alpha \times 0.54(2.71)$	白磁 須惠器(环) 土師器(高坏、魏、竈、坩, 坏)	
S K-155	9-Н	3	8C前半~中頃	$1.80 + \alpha \times 1.57 + \alpha \times 0.29(3.03)$	須惠器(杯蓋) 土師器	
S K-156	G-7	3	8C	$1.38 \times 0.42 + \alpha \times 0.61(2.85)$	須恵器(蓋) 土師器(壺,土編,皿,圷)	
S K-157	F-6	3	8C前半~中頃	$2.43 + \alpha \times 0.92 + \alpha \times 0.71(2.68)$	近世陶磁(伊万里色絵碗) 須惠器(皿,羹) 土師器(高环,壺,甕,皿) 金属器 (鉄釘)	
S K-158	F-4	Ç	8C前半~中頃	$3.20 + \alpha \times 1.60 + \alpha \times 0.47(2.93)$	白磁(碗, 皿) 青磁(同安皿) 中国産陶器(小口瓶, 整, 捏幹, 四耳壺) 須恵器(蓋, 皿, 饕) 瓦器(物) 土師器(壺, 皿, 圷, 漿, 高白圷) 石製品(砥石) 金属器(スラグ)	
S K-159	D-5	3	8C後半	$1.14 \times 0.95 + \alpha \times 0.44(2.86)$	項惠器(杯蓋,甕) 土師器(甕)	
S K-160	E-4	3	8C後半	$3.30 + a \times 1.63 + a \times 0.54(2.81)$	須惠器(魏,坏,坏蓋) 土師器(高坏,壺,魏,皿,高台坏)	
S C-161	D-5	3	7C後半	$4.14 \times 3.12 \times 0.49 (2.75)$	青磁(碗) 国産陶器(變) 須恵器(鐵, 坏, 坏蓋) 土師器(皿, 高坏, 甕, 坏)	
S K-162	E-4	3		$1.63 \times 1.14 \times 0.51(2.84)$		
S K-163	C-3	3	7C後半~末	$0.45 + \alpha \times 0.87 \times 0.43(2.94)$	須惠器(蓋,高台47) 土師器(壺,甕,环)	
S K-164	C-3	3	8C前半~中頃	$1.32 \times 0.78 \times 0.40(2.88)$	土師器(壺,甕,皿,圷)	
S K-165	C-4	3	12C前半~中頃	$1.25 \times 1.15 \times 0.50(2.74)$	白磁(碗) 中国產陶器(鐵) 須恵器(4, 義, 高台水, 水蓋) 瓦器(塊, 皿) 瓦質土器(鉢) 土師器(土鍋, 飯, 坩, 高台水, 皿, 水, 漿, 环蓋) 石製品(滑石製蓋) 金属器(续到)	

<b>土師器・皿・坏法量</b> (口径×高)cm							
出土遺物	白破(碗N・X類) 青白磁(合子) 青磁(龍泉碗1類) 中国産陶器(盤,茶釉四耳 壺,甕,捏鉢,無釉四耳壺,小口瓶,長瓶,壺,水注) 国産陶器(備前他一甕) 須恵 器(甕,坏,坏蓋,高台环) 瓦器・黒色土器類(地) 土師器(皿,环,高台环,菱,甑) 石製品(滑石製品) 金属器(鉄釘)	白磁(硫N·V·V·V類) 青磁(硫, 同安碗 L類) 中国產稿器 (Ⅲ, 水注, 甕, 捏鉢, 小口瓶, 茶桶四耳壺) 国産陶器 (壺) 須恵器 (甕) 瓦器 (埯) 土師器 (Ⅲ, 环, 羹) 瓦金属器 (鉄釘) 自然遺物 (獸骨)	白磁(碗加·叭類) 育磁(龍泉碗1類 同安碗11類) 中国產陶器(四耳壺,變) 国產陶器(變) 須惠器(變,坏蓋,坏) 瓦器(烟) 瓦質土器(鉢) 束插系挂鉢 土師器(肌,坏,幾,高台,杯) 瓦·博 土製品(瓦玉(瓦)) 金属器(铁針) 墨青(磁器·土師器)		白磁(碗V類, 皿, 壶) 青磁(龍泉碗1類,高麗碗) 中国產陶器 国産陶器(灰釉碗) 須惠器(鍍, 坏蓋, 环, 高台环) 瓦器(焰) 土師器(环, 鍍, 高台环, 皿,壺) 瓦,石 製品(石鍋)	須惠器(魏, 坏蓋) 土師器(4元, 坏蓋)	白磁(碗, IV・VI・W・W・X類, 高台付皿口類, 平底皿口・II・V・VI類, 香炉, 型打皿) 青白磁(碗, ロハケ皿) 青磁(龍泉碗・1.類, 同安碗 1・II類) 中国産陶器(埋鉢, 四耳壺, 長瓶, 甕, 茶釉四耳壺, 盤, 小口瓶, 短頸壺, 皿) 国産陶器(菱) 須恵器(74 蓋, 甕, 坏, 高台が) 新羅系壺形土器 瓦器(熵) 瓦質土器(皿) 土師器(竜,土鍋, 坏, 高台水, 高水, 砂、丸・海 土製品(瓦玉(白磁)) 石製品(石鍋, 石珠, 硯) 金 属器(鉄釘) 墨書土師器
規 模 長辺×短辺×深(底面標高) m	$0.80 \times 0.70 \times 0.06 (0.93)$ $2.20 + a \times 1.44 \times 1.21 (1.51)$	$0.72 \times 0.70 \times 0.65(1.31)$ $3.18 + a \times 1.55 + a \times 2.38(1.23)$	$1.36 \times 0.90 + a \times 0.41(3.69)$	$1.40 \times 0.53 + \alpha \times 0.22(3.87)$	$1.73 + \alpha \times 1.47 + \alpha \times 0.46(3.59)$	$1.36 + \alpha \times 0.83 \times 0.13(3.96)$	12 C 中頃~13 C 初 0.55 + a×0.2 + a×0.30(1.36) 3.25 + a×3.08×2.65(1.54)
時期(C=世紀)	12C中頃~13C初	12C後半~13C初	1 13C前半~後半		13C前半~後半	11C中頃~12C初	120中頃~130初
私田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	က	က	-	-		1	H
グリット	I –4	K-2	L-1	L-2	L-2	L-2	J-2
· No	S E-166	S E-167	S K-168	. S K-169	S K-170	S K-171	S E-172

# 博 多 11

一 博多遺跡群第33次調査報告 — 福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集

昭和63年3月31日

発 行:福岡市教育委員会

福岡市中央区大名2-10-29

印 刷:株式会社 チューエツ